
とりあえず、自己紹介でもしますか

緋紹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず、自己紹介でもしますか

【Nコード】

N6754R

【作者名】

緋紹

【あらすじ】

最後に見たものは迫りくるトラックだった――。
俺達は目を開けたとき、何故か見たことのない服を着た村人に囲まれていて・・・

「とりあえず、自己紹介でもしますか」

異世界トリップさらに、リレー小説です。

登場人物紹介

真田 さなだ 紘斗 ひろと

作者 緋紹

- ・平凡
- ・ただし気付くと3人で面倒事を押し付けられている
- ・人見知りなし
- ・一応度胸有り
- ・気の弱い女子苦手

黒井 くろい 夕花 ゆうか

作者 夕

- ・腹黒い その上最強
- ・さっぱりした性格 (紘斗好み)
- ・メガネ
- ・グループ社会嫌い (女子の)
- ・でも懐に入れると超親しい

朝霧 あさぎり 秋弥 しゅうや

作者 秋雨

- ・底抜けに明るい
- ・ホラー大嫌い
- ・誰にでもタメ口
- ・やるときはやる男
- ・それが秋弥

そのだ
園田 紅葉

作者 紅

- ・トリップ遅刻者
- ・前向き
- ・ちょいお嬢様
- ・詳しい経緯は不明
- ・ヨイチに唯一優しい

ヨイチ

作者 プー太

- ・シリティア大好きストーカー
- ・一にシリティア、二にシリティア…とにかくシリティア第一
- ・こっちもやるときはやる男
- ・武道ハンパない
- ・けどトラブル体質ってか不幸体質？

シリティア

・ ツンデレ

・ 赤髪

・ 紘斗、夕花、秋弥、紅葉に懐いている

・ ヨイチ恐怖症

・ でも最近ちよつと見直した

カウジエ

・ 村長

・ 奥さん超美人

・ ちよつと堅い

・ 親バカになりつつある (主にヨイチのせい)

・ トリップした4人を居候させている

ゼファロス

・ 村の子供のリーダー

・ 文字が読める

・ 4人の文字の先生

ブルータス

・ ゼファロスの叔父

「え．．．？」

俺達は、今日の前に広がる光景にただただ驚いていた。

色とりどりの目が、異様なものを見るようにこちらを覗き込んでいる。

青、黄、緑、紫、赤茶．．．。

点滅する豆電球のようだ、と思った。

「どこだよ、ここー!!」

「知らねえよ!!」

小さい声で、秋弥——あさぎり しゅうや朝霧 秋弥がパニックった様子で訊いてきた。

「おい、夕花．．．」

夕花——くろい ゆうか黒井 夕花もいつも眼鏡の奥の冷静な目を混乱したように揺らしている。

どうなってるんだ。

俺——さなだ ひろと真田 紘斗はいつもは平凡すぎてあまり使わない頭をフルで回して状況を整理しようとする。

ついさっきまで街中の歩道を歩いていたはずなんだ。

そう、本当についさっきまで——。

「あー疲れたー」

学校からの帰り道、秋弥が大きく伸びをしながら言った。

「しかし、暑いな」

俺もそれに返事をするように制服のカッターの前を掴んで扇ぐ。

黒いTシャツのせいでより日光があつまるのだろうか。

「もう嫌だ!! 早く家に帰りたい!!」

夕花が汗を拭いながら半分叫ぶように言った。

夏だった。ほとんど日が暮れて昼間よりは涼しいものの、それでも昼間よりは、というだけで十分暑かった。

信号を待つために立ち止まる。

「もうすぐ夏休みだなー」

「でも夏期講習があるだろ。全員参加の」

夕花がだるそうに顔を手で扇ぐ。

駅前のこの道にはパチンコ屋やカラオケ、居酒屋やクラブが結構な割合で並んでいる。

騒音のせいでさらに気分が重い。

スカートをバサバサと扇いで夕花が溜め息をつく。

「新しく開店しましたー、クラブ——ですー」

短いスカートの綺麗な女の人がそう言ってライターを渡してきた。

ライターの装飾で店の名前が書いてあり、なるほど宣伝かと納得。

しかし、何故ライター。

赤信号から青信号に変わって歩き始める。

「あれ？」

秋弥が足を止めた。

「何？」

「こんな店あったっけ？」

秋弥が指差した先には——いかにも怪しげな「占いの館」という名の小さくてポツンとある店。

「うわー」

すごく怪しい。絶対当たらない。

「入る奴いるのか？」

同意を求めて夕花に目をやると、好奇心いっぱい目で目を輝かせているのが見えた。

「え・・・？」

「なあっ入ってみないか？なんか楽しそうだ」

ニヤリと笑う。

うっわやらしい笑い方だな。絶対今占い師の技をことごとく打破する様子を想像している。なんて意地の悪い奴だ。

「いいぜ？暇だし」

秋弥が賛成すると一層その笑みを濃くして中へ踏み込んでいった。中は予想通り薄暗く、警戒心が強くなる。

絶っつ対怪しい。壺に要チェックだ。

自分の中でメモをとってそつと壺から離れた。

意外と魔除けグッズを販売しているらしく、いかにも人形やストラップが置いてある。

何気なく取って見ていると奥から再度いかにも格好をした人が出てきた。

黒のマントに深めに被ったフード。かなり、いかにもだ。

「いらっしやいませ、何かお求めですか？」

「いえ、特には――」

「あたしを占ってもらえないか？」

ああ毒牙にかかった。なんとかして助けたかったのに。ごめん、占い師の人。

図々しく置いてあった椅子に足を組んで腰かけた夕花が楽しげに目を細める。

「わかりました」

座ってしばらく夕花を見つめる。

あれ？水晶とか、いかにもな物が出てこない。

夕花もそれに驚いたのかこちらを見た。

「あ、ああ、もしかして手を出したほうがよかったのか？」

完全に意表を突かれた夕花の手を制して占い師の人の口がつり上がる。

「これはこれは・・・興味深い・・・」

「は？」

「貴女方、お気をつけなさい。災難がそろそろ起きそうですよ」

「え？」

はいきたー！！予想通りの答えきたー！！

「そんなこと・・・」

「信じなくても構いませんよ？私には害はありませんので」

うぐっ・・・！！

夕花も秋弥も困惑した顔をしている。

そりゃそうだろう。特に水晶を覗くでもなく、手相を見るでもなく、顔を見ただけって。

災難の相がー！！とも言わず、ただ災難が起きると。

そんな占い師がどこに存在するだろう？誰が信じられる。

「でも見過ごすわけにもいきませんし・・・。まあ、これを渡しておきましょう」

そう言って占い師と呼んでいいのかよくわからない人は、青く縁取られた手鏡を差し出した。

「ぴっ・・・ぴた一文も出さねえからなっ・・・」

秋弥が動揺を隠せずにどもりながら言う。

溜め息をつきながら、占い師の人は肩をすくませた。

「別に構いません。本来の値で売るのはなら貴女方には到底買える代物ではない」

「へえ？」

夕花が興味深そうに鏡を手取る。

「それが貴女方を守ってくれるよう、祈っています。では」
そう言って奥に引っ込んでいった。

「・・・え・・・？」

なんとも言えない気持ちで店を出る。

「・・・なんか・・・色々と複雑な気分だな・・・」

「・・・なあ・・・」

「災難ってなんのことだろうな？」

夕花が鏡を見つめて呟く。

「さあなあ。怪しいことこの上なかったけど」

「確かに・・・」

道路わきの歩道を歩く。

突然、後ろから光が体を覆った。

その光に振り返って――。

——すべて一瞬の出来事だった。

歩道にいる俺達に向かってトラックが突っ込んでくる。

思わず2人を突き飛ばそうと手を伸ばして、手が2人に触れた時――

さらに強い光が目に入って目を閉じた。

「・・・あれ・・・？」

そして痛みを感じないことを疑問に思っ目を開けた瞬間がこれだ。目の前の人々は見たこともない服を着ていて、髪や目の色が鮮やかだった。

しかし、目に浮かんでいる感情は決して快さそうな感じではない。

「ええっと・・・」

人々を見て、自分の中で最高に愛想良く笑う。
人々がざわついた。

「とりあえず、自己紹介でもしますか」

天国だったらどうする？ (前書き)

2番手の夕です。

夕花目線で書かせていただきます！

天国だったらどうする？

「なに言ってるんだ、絃斗」

こんな時に自己紹介だ？どこまでお気楽なやつなんだ。

「だって…名前わかったほうが…さ？」

周りを囲む、色とりどりの彼ら。

誰もが鋭い視線をあたし達に向けている。

だいたい自己紹介するって…言葉が通じるかすら分からないのに、この状況で名前を名乗れるやつがいるか？いたら教えてくれ。

「お、オレ…：朝霧、秋弥…」

：意外に近くにいたな。

秋弥が名乗ったとたん、村人達がじりつと後ろに下がった。怯えたような表情だ。

「俺は真田 絃斗。高1で16歳」

絃斗が続くと、村人達はさらにあたし達から離れた。

仕方ない。あたしも名乗ってやろう。

一人だけ隠しても意味がないからな。

「あたしは黒井 夕花だ。ほら、次はお前らの番だぞ」

首でくいと促す。自己紹介されたら返すのが常識。

赤髪赤目の男が一步進み出て、あたし達の前に立った。

「見たことのない服を着ているな…：どこからこの村に入り込んだ。それに、その黒い髪と目…なぜそんな色をしている？」

言葉は通じるのか？

ふたりと顔を見合わせる。

「いやー…、俺達に聞かれても…」

肩をすくめながら絃斗が答えると、赤い男はさらに目を鋭くした。

「答える。お前らは何者だ」

他の人々が鍬やら鎌——農具を構える。

もしかして、かなりヤバいのか？背中を冷や汗が伝う。

「そう言えば：オレら、あの時どうなったんだっけ？後ろから光が来て：」

「光……。ああ、そうだったような。紘斗に突き飛ばされた気がするぞ？」

「——そうだ！トラックだ、後ろから大型のトラックが突っ込んできたんだ！」

「「トラック！？」」

ザリツと土が擦れる音。

農具を構えた人々があたし達に迫って来ていた。

「何を訳の分からないことを言っている。こいつらを捕らえろ！」

赤い男の一声で周りを囲んでいた村人達が一斉に飛びかかってきた。

「うえっ！？」

秋弥があわてて立ち上がる。

あたしと紘斗もつられて立ち上がって、戦闘体制しながらに背中合わせになった。

「何をするかわからんからな、生け捕りにしろ！」

生け捕り：物騒な単語を当たり前のように使うな。

農具は手放したが、今度はどこからか縄を持ってきた。

両者どちらも動かない。

——重々しい沈黙ののち、先に動いたのは相手のほう。

「ぐえっ：！！！」

背中を合わせていた秋弥が崩れ落ちる。

「秋弥！？」

振り返ったところを後ろから羽交い締めにされた。

「離せっ！変態がっ！！！」

足をバタバタしても相手は大人の男だ。女の、それも高校生のあたしが敵うはずもなく。

なすすべもなく腕をきつく縛られてしまった。

「秋弥！夕花！」

そんなこんなのうち、紘斗も捕まり、腹を殴られて気絶したらしい秋弥は大男に担がれていた。

「つれていくぞ。さっさと歩け」

縄を引っ張られて仕方なく村の中へつれていかれる。

村の中に入るとたくさんさんの視線があたり達に注がれた。男は警戒して嫌な目を向け、女はあわてて子供を隠す。

「覚えてろよ……っ」

「まあまあ…、なんとかなるさ」

「なんでそんなに落ち着いてるんだ、紘斗」

「生け捕りって言ってたし、殺されることはないだろ」

小さな村なのだろう、少し歩くと村の端に着いた。

木でできた納屋のような小屋の扉が開かれる。

背中をドンツと強く押されて小屋の中に押し込まれた。いまだに気絶している秋弥もあたり達の隣に下ろされた。

「ここで大人しくしてろ。食料は持ってきてやる」

軋んだ音を立てて扉が閉まり、小屋の中は薄暗くなった。

……………

日が傾くにつれてだんだん肌寒くなってきた。

冬なのか？そう言えば、草木が少なかったような気もするな。

「……………ん…、いってー…」

「「秋弥！」」

今まで死んだように動かなかった秋弥が腹を押さえながら身体を起こした。

「あれ、ここは？」

「村の隅。あたり達は閉じ込められた。秋弥が寝てるうちにおきたのはそれだけ」

「なるほど。分かりやすい」

壁に寄りかかっていた絺斗が落ちていた石を蹴った。

「トラックが突っ込んできて、目の前が暗くなった。これって俺達牽かれたってことだよな？」

いつになく真剣だ。

「牽かれたってことはオレら死んだのか！？ここは天国！？」

「うるさい、黙れ。もし本当にそうなのなら、天国ってやつは思っていたような場所ではなかったんだな」

沈黙。

あの占い師の予言が本当になったな…。鏡は何処かへ消えていた。鏡があたし達をここへ飛ばしたという考え方は出来ないだろうか。鏡がなければ死んでいたところを、ここへ来ることで免れた…。なんだそれ、あほらし。

「~~~~~！！~~~~~！」

気まずい沈黙を破ったのはまたしても村人。

外からなにやら大声が聞こえる。

壁に空いた隙間から外を覗くと、村中を男達が駆け回っていた。

「逃げろ！！また奴が来た！！」

天国だったらどうする？ (後書き)

楽しいな、これ。

お次は3番手、秋雨さん。よろしく！

もしかしてピンチ？
(前書き)

三番手の秋雨シユウです！

秋弥目線ですので悪しからず。

もしかしてピンチ？

奴………ってなんだ？

壁に耳を当てて村人の声を聞く。

「女子供を避難させろ！」

「早く逃げろ！」

奴がなにかはわからないが、ヤバイのはわかった。雰囲気からして明らかにやばいし。

「オレらも早く逃げようぜ」

「まずここから出ないと駄目だろ」

夕花が言うことにも一理あるな。

「壁突き破るか。いいものあるし」

絃斗が持っていたのは鍬。

それを振りかぶって壁を壊した。

「おおー」

称賛の拍手を送って現状を確認。

目の前には逃げ惑う村人達とそれを追いかけるでっかい猫。でっかい猫がこっちに気づいた。

これ、ヤバくね？

「—————！」

鳴く………じゃなくて叫んだあとこっちに向かって走ってきた。

「逃げるぞ！」

「言われなくても！」

夕花と絃斗に続いて走る。

でっかい猫との追いかっこ。猫が小さかったら楽しいのに。あれだからなあ。

とか考えてたら追い詰められてた。

「どうするんだ？このままだと喰われてしまうぞ」

「どうするって言われてもな………」

「なんかないかなー」

ポケットの中を探る。

指に冷たいものが当たった。

ライターだ。

ライターか。ライター、ライター……。あ、そうだ。

「燃えるものーっと」

近くにあった枝とかを適当に集めて火をつける。「あー、暖けー」

「いや、何してんだよ」「……たき火」

「確かに暖かいな」「夕花まで……」

とか言いながら紘斗もあたってている。

でっかい猫の反応は？

こっちに来たいけど来れないって感じた。

作戦成功。

いくらでかくても動物だから火は苦手だろ？

たき火に入れてた枝を掴んでデカ猫に投げる。一瞬ビクツとしたがすぐに避ける。

火は宙を舞ってる間に消えてるから怯えなくてもいいのに。

もう一度投げるとやっぱり避ける。

あ、なんか楽しい。

「あたしも混ぜろ」

「俺も」

夕花と紘斗が加わって投げるスピードが上がる。そうするとデカ猫が逃げるスピードも上がる。

第三者から見たらどうなってるかな。

その状態がしばらく続き、腕が痛くなってきた。「そろそろやめるか」

「だな。腕痛いし」枝を束にする。

さっきよりも火の勢いが強い。

それを持ってデカ猫に近づく。

オレが近づく度にデカ猫はそのぶん下がる。

じりじりとデカ猫を森に追い込んでいく。

根気があるな、これ。

森まであと数メートル。

……もういいか。

「うらあ！」

持ってた枝の束をデカ猫に向かって投げる。今度は火は消えなかった。

適当に投げた枝の束はデカ猫の右足に直撃。

「—————！」 声にならない悲鳴をあげて逃げていった。

地面に落ちた枝はまだ火がついていて、草に燃え移ろうとしていた。やっぱ！

慌てて火を踏む。

……よし、鎮火した。

「うおおおおお！！」 いきなりの雄叫び。

叫んだのは村人達だった。

もしかしてピンチ？（後書き）

次は始めに戻って緋紹さん！

がんばって！。

とりあえず、生かされたっぽくね？ (前書き)

一周しました、緋紹です

とりあえず、生かされたっぽくね？

雄叫びに驚いて周囲を見渡すと村人たちが歓声を上げていた。

「化け猫が逃げていったぞ!!」

いや、化け猫じゃねえよ。山猫だわ。

「化け猫を追い払えるなんて・・・」

「一瞬で火をつけたぞ・・・」

あれ、そうなっちゃいます？手品師的な感じになっちゃいます？

「うわっ」

秋弥の小さな叫び声が聞こえた。

そちらを見ると青い髪の方が秋弥の肩を組んでいた。

「すごいなお前ら!!」

いや、あの、貴方の方がすごいっすね。

顎髭も青って。なかなかないっすよ。

「火ってどうやってつけたんだ？」

「あの、ライターで」

「ライター？」

怪訝な顔をされる。

え、知らないの？

ライターぐらいどこの国にもある。多分。

そんなに珍しいものではないはずだ。

「えっと・・・」

「——村長!!」

村長？

声のしたほうを見ると金の髪の方が驚いた顔をしていた。

その男の髪に俺は故郷？を思い出す。

すげえ、金の髪って万国共通なんだな。

金の髪の男の目線の先を辿ると、赤い髪の中年男（ただしかなり強そう）が歩いてきていた。

うわお超怖い！！

赤い髪の中年男が目を細める。品定めされている気分になり、体が硬直した。

「・・・村を助けていただき、感謝する」

「いや、あれは・・・」

自分達も危なかったし、焦ってたし、それがたまたま村を助ける感じになっちゃっただけで。

「一つ尋ねるが、貴方達は村を害するつもりがあるか」

「は・・・」

はぁ！？

害するってあれだよな！？迷惑かけるぜ、襲っちゃうぜ、怪我させちゃうぜ！！ってやつだよな！？
今時ありえないだろう。

いや、ありえるのかもしれないが・・・

俺達がそんな風に見えるのかよ。こんなに安全な雰囲気醸し出しているのに！！

「そんなわけないっすよ・・・」

ガックリ肩を落として返事する。

夕花が慰めるように背を叩いた。

「こちらからも訊きたいことがある」

夕花が眼鏡を直しながら言った。

素晴らしいぞ夕花。とても様になっている。

「ここはどこだ？」

確かに。

頭の隅に異世界という言葉が浮かぶ。

いやっ決して絶対そうだと決めつけているわけではない。

だけど、髪や目が異様なほど色鮮やかだし、ライター知らないし。

異世界がなかなかしっくりきてしまうのだ。

「アルギュロス王国の王都に一番近いシューストン村だ」

ええ！？それってどこっ！！聞いたことないよ！？

「どこから来た？」

「日本国です・・・」

「ニッポンコク？どこだそこは」

「地球という天体にある小さな島国ですよ・・・」

秋弥が消え入りそうな声で返す。

「何故そんな髪色をしてるんだ？」

赤い髪の中年男が俺達の髪を見て言った。

「さあ…遺伝じゃないっすかね」

「魔族じゃないのか？」

「え？」

思わず絶句する。

秋弥と夕花も驚いた顔をしている。

魔族！！魔族きたよ！！すごい、超ファンタジー！！

「違います、れっきとした人間ですよ！！」

「そうか・・・」

夕花が一步前に踏み出した。

「一つ、聞いていただきたいことが」

「ほう？」

「無理を承知で、お願いします。あたし達をここに置いていただけないでしょうか？」

村人たちがざわついた。

「というと？」

「あたし達は何故ここにいいのかよくわかっていないんです。それこそ今立っているこの場所がどのようなところなのかもわかっていない。誓って、村には危害は加えません。どうかよろしくお願いします」

そう言って夕花が頭を下げた。

「ここしか頼れるところがないんです。お願いします！！」

秋弥もそう言って頭を下げる。俺も続いて頭を下げた。

「・・・そうだな」

赤い髪の中年男が踵を返す。

「詳しい事情は中で聞こうか」

い、いいのか？

顔を上げて後ろをついていくと、一軒の民家に着いた。

「――続きを聞こう」

食卓で向かい合って座っていた。

「あたし達は恐らく、異世界から来たのだと思います。こちらの世界とあたし達の世界は似ているようで違っている。髪や目の鮮やかさ、使用する物・・・僅かに、違っています」

「それを信じろってか？」

「信じていたかどうかありません。なにしろ根拠がありませんし、本当にそうなのかもわかっていません。ただし、ここにあたし達が存在しているのは確かなことです」

おお・・・なんか似合ってるぜ夕花。

バリバリ働く商社マンみたいだ。なんか黒い感じの。

「・・・・・・・・」

「あなた、もういいじゃないですか」

女性の声がしてそちらに目をやる。

つい口を開けた。

綺麗な人だな！！

同じく赤い髪を腰までたらした女の人が笑って村長さん（赤い髪の中年男）の肩に手を置いていた。

「だけどな」

「若い女の子もいるんですよ。もう夜遅いことですし、悪い子ではありません。頼れるところがないのでしょうか？ つべこべ言わず置いてあげましょうよ」

「・・・わかったよ。おい」

呼ばれて顔を上げる。

「っ、はい！？」

「ついてこい」

「は、はい」

後ろをついていくと、2階にあがり奥の部屋に通された。

「ここは男2人が使え」

殺伐とした部屋にベッドが2つ並んでいる。

「客人用だったんだが、空いていてよかった」

「あ、ありがとうございます!!」

そのまま夕花を引き連れて去ろうとしていた村長さんが振り返った。

「言い忘れてたが、俺の名はカウジェだ。シューストン村の村長をしている」

「あ、はい!! よろしくお願いします!!」

お辞儀をするとカウジェさんはニヤリと笑った。

「ああ」

そう言って降りていった。

「・・・とりあえず、生かされたっぽくね?」

その夜、初めての異世界だと思われる場所で眠った。

とりあえず、生かされたっぽくね？ (後書き)

次、夕さん!! 次よろしくお願いします!!

居場所確保？（前書き）

二回目です。

居場所確保？

「お前はここでいいだろう」

紘斗、秋弥と別れたあとあたしは村長につれられてある部屋の前に来ていた。

ふたりの部屋とはひとつ空き部屋を挟んで隣。

「誰かの部屋ですね？」

ドアにかかった札を見つける。

アルファベット：英語もあるのか。

さすが万国共通語。

「俺の娘の部屋だ」

娘ねえ…。

隣の部屋が空きなのに、なぜ。

「あたしはその娘さんと同室ってことですか」

村長は耳の辺りを掻きながら、ひとつ咳をする。

「まあ：なんだ、その、話相手にでもなってやれ。お前もひとりはずまらんだろう」

なるほど。

村長なりの気づかいつてわけか。

「――シリティア…？」

札には見事な筆記体でそう書かれていた。

「そうだ。シリティア、入るぞ？」

答えを聞きもせずに勝手にドアを開ける村長。

あたしの父さんが勝手に部屋に入ってきたら、間違いなく怒鳴って追い出すな。

シリティアは部屋の奥のベッドで鏡をのぞきこんでいた。

目だけちらっとこっちを向く。

「なに？」

肩より少し長い髪は村長と同じ赤。目は琥珀色。

年はあたしと同じくらいか。

女のあたしが言うのもあれだが：なかなか美人だな。

これがこの村長の娘だとは、ぱつと見分からないくらい。

「村の不審者の話は知ってるな？」

「んー、黒い人たちのことでしょ？ 魔族みたいな」

また魔族：そんなんじゃないっての。

村長の背中にちょうど隠れているあたしに、まだシリティアは気づいてないらしい。

「その三人のことだが、うちに泊めることになった。お前の部屋に泊めていいだろう？」

「……………」

まずい。嫌な沈黙だ。

シリティアの表情が伺えるように、村長の影から出る。

「こんばんは」

自分の中では精一杯の笑顔だったと思う。

——うわ、すごい嫌な顔してる。

「夕花です。よろしくな、シリティア」

それに気づいたのか気づいてないのか、村長は「仲良くしろよ」それだけ言って部屋を出ていった。

村長がいなくなったとたん、シリティアは大きな溜め息をついた。

「隣の部屋があるじゃない……」

なんで私の部屋なのよ、とぶつぶつ言いながら鏡に目線を落とす。

それはあたしの台詞だ！

とは、まあ、言わないでおこう。

美人なのは顔だけで性格は最悪だな…。

勝手に中まで入って、勝手にベッドに腰をおろす。

「ちよっ、なに座ってるのよ」

「今日からあたしの部屋でもあるんだ。自分の部屋のベッドに座ってなにが悪い」

言い返すとは思っていなかったのだろう、シリティアはじと目であたしを睨むとまた無言に戻った。

ほう、あたしの存在を無視する作戦か。

「綺麗な髪だな」

「……………」

「目の色も」

「……………」

「あたしは両方黒だから羨ましい」

「……………」

こつちを気にしているのが目に見えて分かる。

さっきからずっと髪をとかしているから、たぶん自慢の髪なんだろう。

「そ、そんなことないわよ…」

顔が赤い。勝負ありだな。

「綺麗だって。すっごく」

もうひと押しと…。

急にシリティアが立ち上がった。

そそくさと部屋を出ていく。…と思ったらすぐに帰ってきた。

「今日はここで寝れば？ 今日だけだからね！」

持ってきた毛布を荒々しくあたしに投げつける。

「どーも」

勝った。

夜も更け、もらった毛布の中で丸くなった。

「すっかり馴染んじやってるわね…」

「毛布くれたのはシリティアだ」

「それは…な、成り行きよ！」

「それならいいだろ」

シリティアは言い合いに弱い。ずばっと言ってやると、すぐ大人しくなる。

「そう言えば…、あんた達ほんとはどこから来たの？」

ベッドの上に陣取っていた彼女が怪訝そうにおりてきた。
まだ魔族と疑ってるな？

「日本ってとこだ。知らなくて当然だけど」

「に、ニホン……？」

思ったとおりの反応をしたシリティアにくすつと笑う。

「なに笑ってるのよっ！あんたほんつとに…」

「あんたじゃなくて夕花だ」

あたしにもちゃんとした名前がある。

ぶっすーとふて顔で長い髪をいじる。

「……ユーカ。これでいいんでしょ」

ユーカじゃなくてゆ・う・かだけど、まあ、いいか。

「よくできました」

そう言って頭をぽんぽんすると、シリティアは顔を真っ赤にした。

「あんたやっぱり気に入らない！」

「夕花」

「~~~~~っ」

異世界で初めて友達？ができて、密かに嬉しかったりする。

居場所確保？（後書き）

ほい、終了。

次は秋雨さん。

探検でもしますか(前書き)

秋
弥
目
線
で
す

探検でもしますか

翌日。

オレ達は村の散策を試みることにした。

「まずどこに行く？」

「そう言われてもこの村に何があるか知らないからな……」

「適当に歩けば良くな？」

「それ、いいな」

ということで、適当に歩き回ることになった。

「ここはなんだ？」

「………倉庫じゃないか？」

「食い物がいっぱいだ……」

貯蔵庫らしき蔵の中には食い物がこれでもかというほど詰まっていた。

たぶん非常食だろう。

思わず食べそうになった。

夕花に止められたけどな。

「ここは広場か？」

「だろうな。秋弥ストップ」

「ぐえっ」

開けた空間を探検しようと思ったら絃斗に襟首を掴まれた。
地味に痛いし苦しい。

首をさすっていたら服を引っ張られた。

「んあ？」

振り向いてみると子供が数人。
しばらく無言で見つめる。

「なあ、兄ちゃん達って怖い？」

……はい？

「怖くは……ないと思う」

思わず夕花のほうを見た。

そしたらすつげえ眼光で睨まれた。

「でも母ちゃん達みんな怖がつてるんだぜ」

「そうそう。ぼく遊びに行くなって言われた」

抜け出したけどと笑う男の子に続いておれも私もと言う子が続出。
こんなとこにいていいのか？

「怖がる必要なかったよなー」

「ねー」

「もし俺達が悪い奴だったらどうするつもりだったんだ？」

「どうするって……」

「さあ？」

「それより遊ぼうよ！」

子供達に服をぐいぐい引っ張られる。

伸びるー！

「遊ぶのはいいが、何をするんだ？」

「ちゃんばら！」

夕花の問いににっこりしながら答える女の子。

この村の女の子は勇ましいな。普通はおままごととかじゃないのか？

「ほう、それは面白そうだな」

「お姉ちゃん、私と勝負しよう！」

「ああ、いいぞ」

女の子は夕花を連れて少し離れたところで移動した。

「兄ちゃんはおれとな！」

「おお」

紘斗も連れていかれた。

「兄ちゃんはぼくらとだよ」

オレの目の前には五人の男の子と女の子。
それぞれ木の棒を持っている。

「よし、来い！」

棒を貸してもらって構える。

「うりゃあ！」

迫ってきた男の子の棒を受け止める。

「どうだ」

「すきありい！」

「ぐはあっ！」

後ろから横腹を叩かれる。

痛えし！

「一斉攻撃だ！」

「「わーっ！！！」」

「ちょ、タンマタンマ！」

オレの叫びも虚しく、子供達の攻撃は止まない。

結局夕花と紘斗が止めにはいるまで攻撃は止まらなかった。

おかげでぼろぼろ。

「楽しかったな！」

「ねー！」

「「兄ちゃん、姉ちゃん、また遊んでね！」」

「いつでも遊んでやるぞー」

「秋弥の場合は遊ばれてやる、だけどな」

「確かに」

「うるせー！」

コントみたいなやり取りにひとしきり笑ったあと、子供達は帰っていった。

ぼろぼろになったけど楽しかったからいいか！

探検でもしますか（後書き）

次は緋紹さん！

戸惑うほどの嫌悪（前書き）

緋紹です！

戸惑うほどの嫌悪

異世界へ来て3日目、俺達は朝飯を食べていた。

しかし、元の世界では毎日のように学校へ行っていたからか、こうも遊んでばかりいると居心地が悪い。

何もしなくてもいいというものもなかなか考えものだ。

目の前に置かれているパンだけど中がスカスカのものに肉を詰め込む。

昨日これが出てきた時は半分に割って中にものを詰め込むものだとは知らず、そのままかぶりつき、拍子抜けしてしまった。

慌ててカウジェさんの奥さんが食べ方を教えてくれた。

うん。異世界だという考えは絶対外れていない気がする。

「ごちそうさまでした」

手を合わせて軽く頭を下げる。

「ごちそうさまでした？別にごちそうじゃなかったじゃない」

シリティアが不思議そうに首を傾げた。

昨日の朝、朝飯の時に紹介された時点ですでに夕花と打ち解けていた。

後でこっそり夕花が、「驚くほどのツンデレだ」と教えてくれた。

「ヒロト、どういうこと？」

と言ってからツンと顎を上げた。

「べつ別に知りたいわけじゃないんだからね!!」

「はいはい。教えさせていただきますよ、シリティア」

「早く!!」

紘斗、と言いくいのか、ヒロトとなってしまうっている。

聞けば、夕花はユーカ、秋弥はシューヤになるらしい。

「俺達の住んでた国の挨拶みたいなものかな。どんなに飯が質素でも、食べ物への敬意を示してるんだ」

「そうなの」

うんうんと納得したのか小さく頷く。

片づけ始めた奥さんのところへ食器を運ぶ。

「あの、手伝います」

秋弥が腕捲りをしながら言った。

「大丈夫よ、知らない場所に来てまだ落ち着かないでしょう。村を回っているんな場所を見てらっしゃい。良くも悪くもこの村は広いから、まだ回りきれてないと思ってるのだけだ」

「そうですけど・・・でも」

「置いていただいているのに何もしないというのは・・・」

夕花が後ろから食器を運んできた。

それを受け取って奥さんが微笑みながら夕花を撫でた。

おお超綺麗。神々しくも感じそうだ。

「ニホンは働き者の国なのね」

そつと背を押されて促される。

「・・・すみません」

外に出ると昨日の子供達が昨日と同じ場所でチャンバラをしていた。てか、ちよつと思っただけ、チャンバラってこっちでも同じようにいうんだな。

「あっ兄ちゃん達じゃん。弱かった」

「弱かった言うな!!」

子供相手に本気出せるかよ、とふてくされたように呟く。

まあ、秋弥は子供好きだからな。

「今日も家抜けてきた!!」

男の子が天真爛漫に笑いかけてきた。

「兄ちゃん達悪い人じゃないって言ってるのにさあ、母ちゃん近寄ったらダメ!!」って言うんだぜ？意気地がねえよなあ」

「そ、そうか・・・な・・・？」

うわぁ地味にショック。俺達なんかしたかなあ。

顔に出てたのだろうか、夕花もわりと顔を堅くして背を叩いた。

「仕方ない。人間は、自分達と異なったものを恐れるんだ。ある意

味、本能に沿った行動だ」

「そうだよな・・・」

「シヨック・・・」

「遊ぼうぜ!!」

木の棒を渡される。きちんと剣の形になっていて柄の部分に奇妙な文様が並んでいる。

「これ何？」

「何って俺の名前だけど？」

「えっ文字なの!？」

「はあ？」

なんということだ!! 言葉は喋れるけど文字は読めないのか!! 驚くべき発見!!

「・・・てつきり文字も読めるかと思ってたが・・・」

夕花も驚いた顔をしている。

「どれをどう読むんだ？」

「兄ちゃん達・・・文字読めないの・・・？」

同情したような温かい目で見られる。

いや、あの、違うよ？勉強できなかったわけじゃないよ？

文字を上から差して男の子が名前らしいそれを読んだ。

「ゼ、ファ、ロ、ス」

「そうなんだ・・・。あ、てことはお前の名前ってゼファロスなんだ」

「そう」

「よろしくなーゼファロス」

秋弥が手を差し出す。

「?何？」

「あれっ握手の文化ってないのか？」

「握手？」

「仲良くしようぜーってすること」

「に、握ればいいの?」

「うん」

ゼファロスが手を伸ばして握ろうとした時——大きな怒鳴り声と悲鳴の混じった声が聞こえて思わず身をビクリと跳ねさせた。

「うちの子に触らないで!!」

「えっ……」

髪を後ろでまとめて白いバンダナのようなものを巻いている人がゼファロスを俺達から引き離れた。

周りに群がっていた子供達も親に引っ張られて俺達から距離をとられている。

「昨日も勝手に遊びに行っと思ったら!! 黒髪の奴らと会ったのね!!」

「母ちゃん、だって悪い人じゃないし……」

「それがあいつらの術だったらどうするの!! 村の占術士様のところへ行っって診てもらわないと……!!」

「ヤダよ!! あいつ胡散臭いじゃん!!」

「口答えしないの!! あんたは明日から遊びに行かせませんからね!!」

「あの……」

それはさすがに罰が厳しいだろう。

そう思っって制止しようと手を伸ばす。

「来ないで!!」

ゼファロスをかき抱いて母親が必死の形相で拒絶した。

その嫌悪の強さに戸惑う。

本当に、俺達なんかしたんじゃないだろうか。でもこの村の人達とはほぼ絡んでないし、何かしたならさすがに気付くと思う。

「あ、あの……」

ぐっと肩を掴まれて振り向くと夕花が形のいい眉を顰めて不快そうな顔をしていた。

「夕花……」

「あたし達が何かしたか？」

げっ夕花がキレた。

こめかみに青筋がたっている。

「それは・・・っ」

「何かしていたのなら是非教えてほしいものだな。こちらには何かした覚えがないんでな、何故そこまで忌み嫌われているのかわからない」

「あなたが黒髪だから・・・っ」

「生まれつきのものをとやかく言われても困るな。それで？黒髪だからなんだというんだ？」

「・・・魔族かも・・・しれないからで・・・っ・・・」

「ゆっ夕花っ落ち着けっ」

秋弥が夕花の肩を掴むと煩わしそうに振り払った。
僅かに肩が震えている。

「かもしれない？確かではないのにこんな態度をとるのか？」

「・・・・・・」

「あたし達はあなた達と同じ人間だ。まさかあんな行動をされて何も感じないなんて思っていないだろうな？」

決して荒げてはいないのに、強い怒りを感じて驚く。

そうだ。夕花は確かでも確かでもなくても、誰かを本気で傷つけた
り、傷つけられるのを嫌うのだ。

ならば——この人の言葉は許せないのだろう。

「・・・それは・・・」

夕花の齒軋りが聞こえるような気がして再び夕花の肩を掴んだ。

「夕花、落ち着け」

夕花が強く指を握り込む。強く握り込みすぎて手が白くなった。

「——何やってんだよ姉さん・・・」

「ブルータス・・・」

この間の青の髪の男がゼファロスの母親に向かって溜め息をついていた。

「今のは姉さんが悪いよ」

「でも」

「化け猫を追い払ってくれたのはこの子達なんだよ。恩人にこんな態度をとるのはおかしいよ」

「………」

「そうだぞお前達」

「あなた!!」と言う声が周りで広がる。

見渡すと村の男達が自分の家族をたしなめているのが見えた。

「自分が何もしていないのに周りに姉さん達のような態度をとられたら傷つくだろう?」

「……そりゃ……」

「姉さん達はそれを今この子達にしてたんだぞ」

「あ……」

気まずそうにゼファロスの母親が俯く。

「お嬢さんが怒るのも頷けるだろ?」

「……ええ……」

「第一危険な奴らを村長が外に出すわけがないさ」

「……そうよね」

ゼファロスの母親が俺達に向き直って頭を下げた。

「ごめんなさい、酷いことをあなた達にしてみましたわ」

大人の女性に対等な位置で頭を下げられて戸惑う。

「いや、あの、大丈夫ですから」

「そ、そうっすよ。な、夕花!!」

「……まあ、謝ってくださったのに許せないほどあたしは子供じやないので……」

夕花が笑う。

「じゃあ母ちゃん、俺、罰無し!?!」

「そうよ」

「やった!!」

ゼファロスが喜んで秋弥の手を引っ張る。

「遊ぶぞー!!」

「お、おー!!」

ようやく村に溶け込めた、晴れた日だった。

戸惑うほどの嫌悪（後書き）

次、夕さん！

恩返し（前書き）

いよいよ3周目。

夕です。

恩返し

「あ、兄ちゃん達！遊びに来たのか！」

「おお、ゼファロス。遊ぶか」

秋弥がゼファロスに手をふりながら駆けていった。
ここ、シューストン村に飛ばされて、はや1週間。
あたし達はすっかり馴染んでしまった。

あの日、ゼファロスの母親のことがあって以来、ようやくあたし達に危険がないと村人全員が判断したらしい。

「ヒロトとユーカも！」

子供たちに手を引かれて広場に向かった。

秋弥のやつ、違和感なさすぎだろ…。

広場の中心では、今ではゼファロス含む3人と対等にやり合うまでになった秋弥がいつものチャンバラをしていた。

「ヒロトは僕とやろうよ！」

「おう、手加減なしだ」

紘斗が引っ張っていかれて、あたしも「あたしはユーカとやりたい！」と、誘われた。

「ごめんな。今日は見とく」

「えー…」

「今度必ず戦ってやる。あたしは強いからな」

誘ってきた女の子はしばらく迷ってにかっと笑った。

「わかった」

そうして秋弥とゼファロスの試合観戦に走っていった。

ふう…と小さく溜め息をついた。

広場の隅に積んであった丸太に腰かける。

「元気だなー」

「ブルータスさん」

ふいに声をかけられて首だけ向けると、自慢の顎ひげをなでるブルータスさんがいた。

「ユーカはどうしたんだ？」

「あたしは…休憩ですよ」

「ふーん。そうは見えないけどな」

それだけ言ってブルータスさんは何も追求せず、子供たちのチャンバラに視線を戻した。

簡単に言えばあたしは今、悩みがある。

大人にも受け入れられ、この村での生活はなに不自由ない。村人はみんなよくしてくれる。

でも…だからこそ悩みがあるってわけだ。

あたし達はおいてもらっているのになにも恩を返していかないか？
今夜、ふたりに話してみよう。

「と、いうわけだ」

「なるほど、そーいうわけね」

「そーいうわけか」

ざーっと説明すると紘斗と秋弥は理解したと頷いた。

「恩を返すっても、具体的になにするよ？」

「それを考えるためにあつまっただろう」

「あ、そっか」

ソファで秋弥が伸びをした。

まあ、あたしも案なんか出でないから責めることは出来ない。

「個人的にじゃなくて、村の人がいいよな」

紘斗はカーペットに胡座をかいている。

なるほど…確かにまんべんなく出来る方がいいな…。

「…話し合いの途中悪いけど、あんた達集まる場所間違ってる？」
みんな無言で考えているところにドアが開いた。
立っていたのは風呂から帰ってきたシリティア。

「使わせてもらってまーす」

ひょいと手をあげる絃斗に、シリティアはありえない……というように肩をすくめた。

それでも追い出さないと場所を見ると、最初よりは馴染めたことが分かる。

「なんの話してたの？人の部屋まで来て」

「あたし達がこの村に来て1週間だ。でもなんの恩返しも出来てないだろ？そのことについて」

「あーそれは大問題ね」

普通は、そんなの気にしなくても……とか言うだろ。シリティアらしいけど。

「シリティア、なんかいい案ねーかー？」

「おもいつきり人頼みじゃない。シューヤ、自分で考えなさいよ」

「シリティアのほうが頭よさそうだし」

「……しっ、仕方ないわね！」

秋弥もシリティアの扱いに慣れてきたな。

秋弥ナイスと絃斗が小さく耳打ちしていた。

「あんた達はニホンってところ来たんでしょう？だから、そのニホンの技術で私達の手伝いをすれば？」

自慢気に言い切ったシリティアに、あたし達は顔を見合わせる。そして。

「いいじゃん、それ！要するに『なんでも屋』ってことだろ？」

絃斗が目を輝かせて言った。

「なんでも屋：万事屋か！オレも賛成、夕花は？」

万事屋：それなら誰にでも、誰の手伝いも出来る。

「賛成に決まってるだろ」

ソファーから飛び起きて秋弥が拳を突き上げた。

「シューストン村万事屋結成！！」

あたしと絃斗も立ち上がって拳を突き上げた。

「明日から早速活動だ！絃斗、夕花、シリティア！」

「「おーっ」」

あたし達が盛り上がる中で、シリティアだけが怪訝そうに眉をひそめた。

「ちょっと待って、あたしも!？」

紘斗がシリティアの肩をぽんと叩く。

「俺たちまだ村のこと詳しく知らないし、シリティアがいたほうがいいかなーって」

「むう…」

そんなわけで万事屋結成。

ただいまメンバーは4人。

異世界での生活も悪くない。楽しくなってきたな。

恩返し（後書き）

秋雨さんよろしく♪

宣伝でもしますか(前書き)

秋雨です！

宣伝でもしますか

「結成しただけでは誰も依頼はしないだろうから知名度を上げないとな」

「要するに宣伝だろ？」

「ああ。とりあえず、秋弥は俺と子供達に。夕花はシリティアと大人達に伝えてくれ」

紘斗がテキパキと役割を決めていく。

「ああ、わかった」

「しょうがないからやってあげるわ。やりたいんじゃないんだからねっ！」

「行くぞ、シリティア」

まだ何か言おうとするシリティアを引っ張って夕花は出ていった。

「秋弥、俺らも行くぞ」

「おう！」

紘斗の後を追って部屋を出た。

子供達に伝えるには広場が一番！

ということだ。広場に来た。

案の定、たくさんの子供がちゃんばらして遊んでいた。

「あつ、兄ちゃんだ！」

「ほんとだ！」

「遊ぼう！」

子供達が一斉に寄ってきた。

「今日は言うことがあって来たんだ。」

「えー！遊ばないのー？」

「ごめんな」

近くにいた女の子を紘斗が撫でる。

それだけでその女の子は大人しくなった。

「言うことっていうのは、俺達が万事屋を結成したってことだ」
「よろずや？」

「簡単に言うとなんでも屋だな」

「なんでもしてくれるのか？」

「頼まれればな」

「ならさ、俺らと遊んでよ！」

目がキラキラしてますよ。キラッキラですよ。

断る？無理無理。

「紘斗……」

ちらっと見てみる。

「んー、やることはやったし、遊んでもいいだろ」

「よっしゃーっ！」

「やったー！！」

「シューヤは俺たちとな！」

「ヒロトは私たちと！」

いつものように棒を貸してもらう。

「今日はどいつだ！」

「全員！かかれー！」

「わーっ！」

毎日同じことをしても飽きない。

むしろ楽しい。

「どうした！こんなもんか！？」

「このやろー！」

突っ込んできた男の子を軽くいなす。

最初はこれができなかったんだよなー。

「隙あり！」

「どおっ！？」

油断してたら足を引っ掛けられてこけた。

「今だー！」

こけたところに一斉攻撃。

避ける？無理無理。

囲まれてるし。

棒はどっかいったし、防ぐ手段がない。

「ま、待て！痛っ、痛いから！」

「やっつけちゃえ！」

「ギブ！ギブアップ！降参！」

「楽しそうだな」

いつの間にか夕花とシリティアが来ていた。

「夕花！助けて！」

助けを求めたのに返ってきたのは微笑み。

「シリティアー……」

「しょうがないわね。……べっ、別に可哀想なんて思っていないんだからねっ！」

そう言いながらもたすけてくれた。

「ふいー、助かった。あんがと、シリティア」

「兄ちゃん！こっち来てー！」

「どーしたー？」

「誰かいるー！」

誰かいるって……。

別にオレらを呼ばなくてもいいのに。

「いってみるか」

「だな」

「あたしも行こう」

「おいてかないでよ！」

四人で行ってみると、子供達に囲まれた黒髪の少女が座っていた。

「ここ、どこ？」

「いや、誰？」

宣伝でもしますか（後書き）

次は新メンバー！

よろしく

異世界ってなんですか？
(前書き)

初めまして。

紅^{べに}です。

今回から仲間入りです!!

異世界ってなんですか？

時は少しさかのぼり――

「はあ……。」

私、園田 そのだ 紅葉 くれは は、いたって普通の女子高生だ。

普通に勉強は出来るし、普通に部活にも入ってる。

毎日が充実している……はずなのに。

この喪失感なんなのだろう。

――疲れてるのかな。放課後だしね。

そう思った時に、声を掛けられた。

「何かお悩みですか？」

声が出たほうに振り向くと、そこには真っ黒なマントを羽織っている人がいた。

顔が隠れていて、よく見えない。

いかにも、な占い師の格好をしている。

――怪しい。

私の脳内は一瞬で「警戒」という単語で埋め尽くされる。

そんな私の様子を察したのか、

マントの人は柔らかい口調でこう言った。「私は怪しい者ではございません。」

……と言っても信じられませんかよね。

とりあえずこの手鏡を持ち歩いて下さい。」

「……どうして？」

手渡された手鏡は、とても綺麗な装飾がされている。

それでいて、どこか妖しげな雰囲気をもっていた。

「あなたに不幸の相が出ています。」

この手鏡を持ち歩けば、不幸を回避することができる……。」「
馬鹿馬鹿しい。」

人々はそう思うかもしれない。

私もそう思っていた：この時まで。

「あなたは今、訳もなく喪失感にとらわれていませんか？」

「……っ！！」

しかしその考えは一瞬で崩れることになる。

「：不幸なことが起こる前兆です。

くれぐれもお気をつけて……。」

「……………」

私は手鏡を持つ手に力を込める。

——所詮占いだもん。

——嘘：だよな？

そう無理矢理、信じ込みながら……。

「それにしても：お金払わなくてよかったのかな？」

占い師と別れ、今はまじまじと手鏡を凝視していた。

——綺麗だとは思うけど：本当に効果があるのかな？

そんな疑問が頭によぎったが、すぐにそれを打ち払った。

——所詮、占い。

そしてまた、同じことを思い込む。

そんなことなら、この手鏡を割ってしまえばいいのかもしれない。

でもなぜか、私にはとても出来なかった。

——不幸がどうか言ってただけど：

——もう気にしないでおう。

——所詮、占いなんだから。：なのに、どうして？

どうしてこんなことになったのだろう。

「お嬢ちゃん、危ないっ！！」

——え？

頭の上から叫び声が聞こえると同時に、

工事現場独特の騒音が耳を貫く。

私は他人事のように、上を見上げると：

目の前には4、5本の鉄骨が迫っていた。
私はその場に立ち尽くしたまま――：

派手な音。

重なった鉄骨。

「お嬢ちゃんは……!？」

「え、消えた……!？」

子供の声が聞こえる。

――ああ、これは天使の声かな。

――私……死んじゃったのかな。

そう思いながら、私はそつとまぶたを開いた。

「あ、目を覚ましたみたい。」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

子供たちが、私に声を掛けている。

でも子供たちの姿は、天使などでは無く……

一言で言えば、カラフル。

目の前には原色で溢れていた。

そのせいか、目がチカチカする。

「うん……大丈夫だよ。」

私は子供たちにそう言って、微笑んだ。

「よかったあ。」

子供たちは無邪気に笑う。笑う。

そして一人の子供が、こう言った。

「お姉ちゃんの黒髪……ヒロトたちみたいだね!」

――誰？

「お姉ちゃん、どこから来たの？」

「日本ってところからだよ。」

「わあ!! ヒロトたちと同じだあ!!」

――ヒロトって人たち、もしかしたら……

——私と同じ状況の人たち？

「ねえ、その人たち、どこにいるの？」

私はほんの少しの期待を込めて、
子供たちにそう聞いた。

「んつとね、向こうでチャンバラしてる！」

どうやらヒロトという人物たちは、この近くにいらっしゃるらしい。

——その人たちは……

——どうして、ここに来てしまったのだろう。

そんなことを考えていると、4人分の影が地面に映し出されていた。

2人の男の子と、2人の女の子……1人の女の子は、

3人と違って、赤髪だったのが印象的だった。

私は口を開く。

「ここ、どこ？」

「いや、誰？」

質問したのに、質問を返される。

そこにはあえて突っ込まず、自分の名前を名乗った。

「私は……園田 紅葉。」

……私の質問にも答えて。

ここはどこなの？」

すると黒髪のほうの女の子が、こう答えた。

「一言で言えば……異世界だ。」

——異世界？

この人は、本気でそれを言っているのだろうか。

「はい？」

「いや、本当だよ。」

本当だと言われても……こんな漫画みたいな状況、誰が信じるの！
？

異世界ってなんですか？（後書き）

駄文スマソです…

次は緋紹さん、よろしくです。

新入り君（前書き）

この小説を読んでくださっている方がいらしてください、とても感激しています。ありがとうございます、とても嬉しいです。感想のほうをいただければと思っています。一言でもいいので、よろしく
お願いします m () m

新入り君

俺達は今、村の広場のベンチ（木を平らに削って横に倒したもの）に腰掛けている。

俺の隣に秋弥、向かい合った目の前の同じようなベンチにはシリティア、夕花、——そして、恐らく、俺達と同じ世界から来たと思われる、黒髪黒目の女の子。俺達と年代だと思われる。

何故、再び、こちらへ人がやってきたのか……。

「あの……」

黒髪の女の子が恐る恐るというように俺達に話しかけた。

「はっ、はいっ？」

「お聞きしますが……ここは、その、どこでしょうか？」

うわおこっちに来たばかりの俺達とまったく同じ質問!!!
ですよね!!! そうなりますよね!!!

黒髪の女の子はシリティアの髪色を不思議そうに、しかし気付かないように盗み見ている。

残念ながら目の前にいる俺の目にはぼっちり映った。

わかるわかる。俺達と同じ世界から来たのなら、シリティアの髪色は鮮やかすぎる。自然色ではありえない色だ。

「あらぁお父さんから聞いていたのだけど、ヒロト達と同じ質問ねえ」

「ヒロト？」

女の子の顔が変わる。

なんだ？

「あの、この中にヒロトって方がいらっしゃるんですか？」

「え？」

突然尋ねられて夕花達と顔を見合わせる。どうして俺の名前に反応するんだろう。

「知り合いか？」

秋弥がこっそり耳打ちしてきた。

「いや．．．知らないと思うけど．．．」

「あの？」

「えっ？あつ、ああ。えーっと、そのヒロトっていうのは俺です。けど、あの、俺、君のこと知らないんだけど．．．」

「あなたがヒロト．．．」

「おい、紘斗」

夕花が俺に向かって目線をやる。

小刻みに頷いて了解の意思を示した。

「とりあえず、自己紹介でもしますか」

全員の自己紹介が終わった後、その女の子は自らを園田 紅葉と名乗った。

「でも、本当にどうなってるの？私はさっき、街中にいたのに」

紅葉が気になることを小さく呟いた。

「あの、ここはどこですか？日本ですか？」

「やっぱりね！！やっぱり同じ日本人でしたか！！」

「この子もヒロト達と同じこと言うのね。残念ながらここはニホンじゃないわ。アルギュロス王国のシューストン村よ」

「アルギュ．．．え？どこって言いました？」

「聞いたときなさいよ！！アル・ギュ・ロ・ス王国！！」
ますます混乱した顔をした。

「えーっと、あのさ、えーっと紅葉でいいか。紅葉、落ち着いて聞いてほしいんだけど」

「え？」

急に名を呼び捨てにされ、驚いたのか僅かに瞳を見開いて俺を見る。うん、ごめんね。でもさ、この状況で名前を呼んでもらえるのとそうじゃないのでは気持ちの安定感がまるで違うんだよ。——特にこういう特殊な状況の時は。

「夢じゃないってこともわかってほしいんだ」

「え？は、はい、？」

首を傾げている紅葉にどう切り出したらいいかわからず、つい頭を搔く。

「ここは、君のいた世界じゃない」

「は？」

ポカンと口を開ける。

「えーっと、なんていうか、異世界？っていうのか？多分、そんなところ」

「な、そんな、ええ・・・」

「信じてもらうしかないんだけどな。だから、この世界に日本は存在してない」

秋弥がそう口を開いた。

そう。信じてもらうしかない。確かな確証など、得られていない。

日本は存在してないという言葉に酷く瞳を揺らした。

俺の中で少し苦手意識が立ち上る。

俺は、簡単に崩れてしまうような女の子が苦手なのだ。どう接するべきか、どうすれば崩れないのか、それが掴めない。そういう煩いがあつて、苦手だった。些細なことで、簡単に崩れない屈強な性格の夕花とは共にいられた。

頼むから、泣かないでくれな。

「そんなのっ・・・どうしてわかるのっ・・・？日本が存在してないっ・・・なんてっ・・・」

口調を小さく震わせ、俺に向かって聞く。

俺は簡単に手折れそうな花を思い浮かべた。

「あたし達も、君と同じ世界からここへ来たからだ」

夕花が眼鏡の奥の目を紅葉に向けて言った。

「・・・あなた達も・・・？」

紅葉の目に動揺が広がる。

「ああ。紅葉、聞きたいことがある。紅葉はここに来る前、何か渡されなかったか？そう、例えば——鏡、とか」

「鏡？そんなの・・・」

渡されなかったと答えようとしたのだろう、紅葉の言葉が途切れる。

「何・・・」

慌てたように立ち上がって体中を手で探り始めた。

「ない！！なんで！？確かに渡されたのに・・・！！」

「やっぱり渡されたんだな？鏡か？」

「うん。どうして・・・？」

「誰に、なんと言われて渡された？」

「誰かはわからないけど、いかにもな黒頭巾を羽織った女の人に危険が起る前兆だなんだって言われて渡されたと思う」

「黒頭巾って・・・！！」

秋弥が身を乗り出す。

夕花が軽く頷く。

「何？何なのよ？」

シリティアが気になったのか夕花の腕を揺さぶって解釈を要求した。

「俺達もここに来る前に似た人に鏡を渡されたんだ」

「え？」

ということは、ここに来た理由にあのいかにもな占い師が関わっているということか。

夕花に目をやって先を促した。

「その後何か起こったか？」

「何かって・・・ああ！！」

紅葉が大きい声を出して座ろうとしていた腰を再びあげた。

「そういえばそうだ！！どうして私生きてるの！？」

「何があっただんだよ？」

秋弥が急かす。

「鉄骨が倒れてきたの・・・それで目を開けたら、ここに・・・」

俺達とほぼ同じ・・・。

何か考えこんだ夕花を見て、一通りの質問は終わったのだろうと考え、紅葉に話しかける。

「紅葉、あのな、気持ちはわからないこともないけど、今は混乱してる場合じゃないんだ。これから先、どうするか考えないと」

ハッと我に返って顔をあげた。

その瞳を見て思わず周囲には気付かれなかっただろうが、うろたえた。

理由は、紅葉が崩れそうだったから——ではない。その逆、とまでは言えないが、混乱しながらも、何も考えられないほどは崩れておらず、強い光を、己で動こうとする意志を瞳に宿していたからだ。俺の中から苦手意識が薄れていくのがわかった。

「そう、そうだよ。このままじゃ、生きていけないもん」
ふっと小さく息をついた。

「どうしよう・・・」

「ちよっと」

シリティアが腕組みをして俺達を見ていた。

「どうした？」

「要はこの女もユーカ達と同じ異世界から来た人間なのよね？」

「そうだ」

夕花が頷く。

「じゃあ家に来なさいよ。べっ、別に助けてあげるわけじゃないんだからね!!」

「えっ…いいの？」

「いいわよ、来るの、来ないの!？」

「あの、じゃあ、お願いします!!」

「来るなら初めからそう言いなさいよね!!」

ポカンと口を開けて紅葉が呟く。

「生ツンデレ・・・」

「何よそれ？」

「ううんっなんでもないっ」

手と顔を何回も横に振って誤魔化す。

うん。わかるよ。なんか誤魔化さないとイケない気持ちになるんだ

よな。

「でも、いいのか？ カウジェさんに聞かなくて」

そう言うとなんを今更、とシリティアは肩を竦めた。

「もう、うちには3人も異世界からの旅人が寝泊まりしてるじゃないの」

確かに！！

「ホントにありがとうっ」

紅葉が頭を下げる。

その晩から、シリティアの部屋には、もう1人、人数が増えた。

新入り君（後書き）

次は夕さん！！頑張っ
てー！！

新たな家族（前書き）

夕です。

紅さん、これからよろしくお願いします！

新たな家族

「なんか：視線を感じる…」

シリティアの家に向かう途中で紅葉が言った。

「制服が目立つんだろ。あとでシリティアの服を貸してもらえばいい」

「ちょっとユーカ！勝手に決めないでよ」

「いいじゃないか。現にあたしも貸してもらってる」

「それはそうだけどっ」

今のあたしの服装は、薄茶のワンピースに黒いカーディガン。全てシリティアの物だ。

これでも地味なほうらしい。

紘斗と秋弥は村長のつてで村の同い年に貸してもらっていた。

「お願いします。シリティアさん」

紅葉が小さく頭を下げると、シリティアはツンとすまして言った。

「シリティアでいいわ。これから同じ家に住むわけだし」

「は、はい。お願いします、シリティア」

「敬語もいらないわよ」

そんな二人のやり取りを見て、あたし達は顔を見合わせ笑った。

家に着くと奥さんが一人、紅茶を飲みながら本を読んでいた。

村長は村の集会に行くと行っていたか。

「帰りましたー」

すっかり慣れた男ふたりが中に駆け込む。

「お帰り。紅茶入れましょうか？」

そう言いながら、もう紅茶の缶を取り出している。

「私達はいいわ。ユーカ、クレハ、行きましょ」

そこで奥さんが紅葉に気付いた。

黒髪をじつと見て何か考え込んでいるようだ。

まあ、それも仕方ない。この村にあたし達以外の黒髪はいないから。

「あ、私は…」

「もしかしてニホンから来たのかしら？」

「は、はい！園田　紅葉といいます。気付いたらここにいて…」

奥さんは立ち上がったあたし達のほうへ来ると、紅葉に優しく微笑んだ。

「シリティア。あなたの部屋、まだ大丈夫よね？」

「もっちゃんよ！」

紅茶の匂いを感じながら、二階に上がった。

「ここが私の部屋よ」

シリティアがドアを開けて中に入ると紅葉も続いた。

「服、好きな選んでいいわよ」

クローゼットの中に入れてあるのは、ほとんどがワンピース。しかも派手な物が多い。

あたしはソファアに座って、どうなるか見届るとするか。

「…全部かわいいから迷うな」

紅葉が一着ずつ目を通して言えば、シリティアの顔が真っ赤に染まった。

相変わらず褒めに弱いな。

「あ、当たり前よ。私の服だもの」

「シリティアってこういう服似合うよね」

紅葉、それは素で言っているのか違うのか。

シリティアが林檎みたいになったじゃないか。

「これにしようかな…でもこれも…」

これは経過を見るより、シリティアを見たほうが面白いな。

クローゼットの前で、あれでもないこれでもない…と唸っている紅葉をシリティアが押し退けた。

「え？」

「私が決めるわ」

もちろんいつものツンは忘れない。

「別にクレハに似合うのを探したいわけじゃないんだからねっ！」

「探したいんだね」

探したいんだな。

凄まじいスピードでクローゼットからワンピースを選びだすと紅葉にあてる。

「これは？」

「け、結構ハデだね」

「そう？」

おかしいわね…と閉まって次の服を探し初める。

そう、シリティアの選ぶ服はどれもリボンやらレースやらでひらひらしている。

あたしもそんな服を幾つも合わせられて、戦った結果なんとか今の服におさまった。

「じゃあ、これね」

今度のは真っ白のワンピースに水色のリボン。そして青の上着。

「まあ、これなら…うん」

「決まりね！着替えて」

「ここで！？」

「当たり前でしょ、なんなら隣行く？お父さんの部屋だけど」

「うー…」

5分もすると紅葉の着替えは終わった。

今まで着ていた制服はタンスの奥、あたしの制服の隣にしまわれた。再び着ることはあるのだろうか。いや、考えないでおこう。

「似合うかな？夕花ちゃん、どう？」

夕花ちゃん…。

「似合ってるぞ。あと、あたしのは夕花でいいからな」

ちゃん付けされるとどうも落ち着かない。

「ヒロトとシューヤにも見せに行きましょ！」

「え？ええ！？」

シリティアに引っ張られて、あっという間に紅葉は部屋を出ていった。

階段を慌ただしく下りる音と、それを注意する奥さんののんびりした声が聞こえた。

あたしも下りるとしようか。

「ん？そう言えば…」

階段を下りる途中でふと足を止めた。

万事屋のこと言うの忘れてたな…。

新たな家族（後書き）

秋雨さん任せた。

シリティアの依頼（前書き）

秋雨です！

シリティアの依頼

「ひーまー……」

暇すぎるから部屋の中をゴロゴロ転がる。

「秋弥止めろ。危ない」

「うえーい……」

絃斗に止められて止まるが、やっぱり暇。暇なもんは暇なんだ。暇ー暇ー。

「そうだ、夕花のところに行こう」

「唐突だな」

よし行こう。さあ行こう。

「ゆーうかー!」

「なんだ?」

ドアを壊す勢いで開けたのに平然と本を読んでいた。代わりに紅葉が驚いたけど。

「何か用か?」

「用はない!けど来た!」

そう言ったら呆れた顔をされた。

「絃斗はどうした?」

「ここにいるぞ」

「用件は?」

「ない」

お前もか……みたいな顔になる。

「暇だったんだよー」

「そうか」

……遊びに行こうかな。

結局外に行かずに部屋にいと、シリティアが戻ってきた。

「あら、皆いるのね」

「おー、お帰りー」

「あ、……………」

何か言おうとしたシリティアが言い淀む。

「どうした？」

「……ねえ、依頼してもいいかしら。べつ、別に困ってるんじゃないんだからねっ！」

困ってるから依頼するんじゃないのか？

「ああ、そのための万事屋だからな」

それを聞いたら安心したような顔になった。

「あの、万事屋って何？」

紅葉がおずおずと手をあげる。

「ああ、そういうえば説明してなかったな」

「万事屋っていうのは俺達が結成したなんでも屋だ」

「名前の通り依頼されればなんでもするぜ！」

「なんでも屋か……」

「紅葉もやるか？」

「えっ、いいの？」

「もちろんだ。いいだろう？」

首だけ動かして夕花がこっちを見る。

「俺もいいぞ」

「オレも。人数が多いほうが楽しいしな」

「これで紅葉も仲間だ。これからよろしくな」

夕花が紅葉に手を差し出す。

「えっと、よろしくお願いします」

紅葉はその手をしっかりと掴んだ。

「……ねえ、依頼してくれるの？べつ、別に寂しくてしゃべったんじゃないんだからねっ！」

ごめん、シリティア。

目に光るものが溜まってるぞ。

「ごめんな、シリティア。それで、どんな依頼なんだ？」

「それが、……………」

「ストーカー!？」

「しーっ!どこにいるかわかんないんだから!」

息、息が!

大声だしたのは謝るから口塞ぐな!

オレの祈りが通じたのか、シリティアが手を離してくれた。
オレ、生きてる?

「とにかく、そのストーカーをなんとかしてほしいの」

「シリティアならストーカーくらいなんともないと思うけどな」

「そうなんだけど、何もしてこないからこっちも手を出せなくて…

…」

ストーカーか。

「どうにかしてくれないかしら」

「その依頼、引き受けた」

「ストーカーを撃退すればいいんだろ?」

「そのくらいなら簡単だ」

「出来る範囲で頑張ります!」

「頼んだわよ」

「「「了解!」」」」

その時、誰かに見られている気がした。

例のストーカーか?

シリティアの依頼（後書き）

次は紅さん！

よろしくー。

万事屋、活動開始。
(前書き)

紅です。

緊張しました。

万事屋、活動開始。

――次の日。

「えと……これ、つつこむべきなのかな……。」

私は紘斗と秋弥の格好を見て、苦笑いをする。

「……紅葉もそう思うか？」

なあ、それじゃあ目立つただけだぞ。」

夕香はそう言って、呆れたようにため息をついた。
すると秋弥はキッと私たちを見てこう言った。

「何言ってるんだ！」

シリティアの一大事だぞ！？

同じ女なら分かるだろ！」

「分かるよ。分かるけど……。」

「その格好は無いだろ……。」

2人は、今から不良グループのアジトに乗り込むんですか？
と思わせるような格好をしていた。

とりあえず、目立つ。

――これじゃ逆効果なんじゃ……。

――やっつける前に逃げられちゃうよ！

そう思った私は、2人にこう言った。

「その重装備は怪しいよ……。」

せめて木の棒を1本減らして！」

「いやいや……いざという時、臨機応変に対応できないだろ？」

紘斗が、少しもっともらしいことを言う。

――木の棒を1本減らしても、臨機応変に対応できると思うんだけど……。

納得がいかない私の肩に夕香はポン、と手を置く。

「もう……諦めよう。」

「うん、そのほうがいいみたいだね……。」

そして私たちは、一度息を吸って、盛大なため息をついた。

——シリティアが気の毒だなあ……。

そう思った時、私の隣に人が来た。

「……シリティア！」

「なんか……ボディーガードしてくれるような感じね……

って、別に守ってくれて嬉しいとか思っていないんだからねっ!!」

「はいはい、嬉しいんだな。」

夕香はクスリ、と笑いながら、そう言った。

「……からかわないでっ!! 嬉しくもなんともないわよ!!」

そう言って、そっぽを向くシリティア。

なんだかストーカーされる理由が分かった気がした。

だから、

「シリティアって……かわいいね。」

と思わず言ってしまった。

そっぽを向いているから、顔はよく見えなかったけど、
きっと顔を赤くしているんだろう。

実際、耳が真っ赤だ。

そんなシリティアを見て、4人で笑った。

その時。

ガサッ……。

私は小声で、こう言った。

「……聞こえた？」

「ああ。」

「今のは多分、足音だな。」

「シリティア、どうなんだ？」

あたしはストーカーだと思うんだか……。

夕香がそう聞くと、シリティアは身体中を震わせ、こう答えた。

「いつもと同じ視線を感じる……。

もう、イヤ……!」

こんなシリティアを見るのは初めてで、私は動揺した。

他の3人もそうみたいだ。

「くそっ……！」

ストーカーの野郎、許さねえ……！」

秋弥はこぶしを震わせ、そう言った。

「とりあえず、家に帰るぞ。このままじゃシリティアが……。」「
夕香の提案通り、私たちは家に帰った。」

——私たちがシリティアを救わないと……！」

万事屋、活動開始。(後書き)

緋紹さん、よろしくです！

僕が守るしかないでしょう！（前書き）

お初にお目にかかります。

どうも、プー太です。

誘ってもらったので、小説に途中参加させていただきます。
よろしく願います。

僕が守るしかないでしょう！

最近、村に変な奴らが突然現れた。

突然現れて、一週間ばかりですんなり村に馴染んでいた。

奴らは四人。

男が二人に、女が二人——片方は遅れてやってきたみたいだが。

しかし、それはどうでもいい。村にはいろんな人がやってきて当たり前だからな。

だが、一つ……いや、何個か問題がある。

風の噂によると奴らは異世界のニホンとか何とかいう国から来たらしい。

それに魔物かもしれないという疑いがかかっているのだとか……。

そして、最大の問題が奴らは僕の想い人のシリティアの家に住み着いたことだ。

なんて羨ましい……いや、違う！なんてことだ！

そんな怪しい奴がシリティアと一つ屋根の下で寝食を共にするなど危険でしかない。

し・か・も・だ、その中には男がいるなんて……。

過ちを犯さないわけがない。

自信をもってそう言える理由は僕のシリティアはそんなじよそこの平凡な女じゃないからだ。

あの燃えるような美しい赤毛。見る者を魅了する愛らしい琥珀のガラス玉のような瞳。形のいい唇から発せられる聞きあきることのない美しい声。さらに、スタイルが何とも言えないほど整っている。そのほかに彼女のいいところを挙げろといわれれば幾らでも言ってやろう。

——まあ要するにそんな神のような彼女に惚れない男がいるわけがないわけだ。

ああ……心配だ。

シリティアは果して無事なのだろうか。

男どもにセクハラをされてはいないだろうか…。

僕は心配過ぎて夜も眠れない。

僕がこうして考えてる間にもシリティアの身に危機が迫ってはいないだろうか。

考え過ぎて胃が痛む…。

どうすれば守ってあげられる？

…そうだな、良い策が浮かんだぞ。僕があいつ等をあの家から追い出せば…はっ！

そうだった、僕は喧嘩ができないんだった。

くそう…こうなれば近くで監視する以外に方法が浮かばないじゃないか。

しょうがない、そうするか…。

そうと決まれば早く行動に移そう。

念のために棒（使えないけど見た目的に必要なだと思って一応装備）と、望遠鏡を持って家を飛び出した。

よってこの日から僕はシリティアを守るために監視を始めたわけだ。私生活の大半を監視して過ごしていたが、奴らは動きを見せなかった。

そして、僕が突入して助け出すカッコいいシーンが訪れることなく三日が経った。

あいつ等を見ているはずが僕の視線はどうしても逸れてシリティアにいつてしまう。

今日も美しい…。

監視という名目上、僕はシリティアの様子見も任務に入れることにした。

そうじゃないと男ばかり見るようになって目が腐る。きっと腐る。

僕は間違っていない。

うんうん、と一人で頷いていつものように木の陰から覗いてみた。

「…ボディーガード…」

何を話しているのかはちゃんと聞き取れなかったがその単語は分かった。

何の話だ…？

ばれないように足音を立てず、別の木に移動する。

「……別に守ってくれて嬉しいとか思っていないだからねっ!!」
なに!? 僕がこうやってシリティアを陰ながら守っていることがバレてたなんて!

僕の努力に気付いてくれてたなんてシリティア、君は…。

溢れそうになる涙を唇を噛んで我慢しながらシリティアを見つめた。

「……嬉しくもなんともないわよ!!」

「はいはい、嬉しいんだな」

そっぽを向いてしまったからあまりよく見えないが確かなことが二つ。

シリティアが赤面していることと、照れていることだ。

か、か、か…可愛い…!

耳まで赤くなるほど照れてるなんて! どうしよう、抱きしめたい! それであわよくばあの唇に僕の唇を…。いや、我慢だ。ここで出たら駄目なんだ。

妄想を爆発させていると鼻梁にねっとりとしたものが伝った。それが何か、なんて考えなくても分かる。

「くそっ、こんな時に鼻血なんて」

妄想を即座に終了させると鼻を押さえて急いでその場を去った。運動神経が良いわけではない僕が走っても速くは家にたどり着けない。

たまに擦れ違う村人に「鼻血だー」「ホントだ鼻血で服の色が変ってる」なんて笑いものにされながら帰宅した。

部屋に籠るとついさっきの言葉が浮かんできた。興奮するせいかな、走ったせいなのか定かではないが早く鼓動する心臓がうるさい。まさかシリティアがあんな風に思ってくれていたなんて思わなかった。

明日からはもう少し近づいても大丈夫かもしれない。

落ち着け、落ち着けと自分に暗示をかけてみるが心臓は相変わらず早く動く。

未だに止まらない鼻血を布で拭っていると自然と笑みが漏れた。

シリティア：君は僕が守るから。なーんて。

僕が守るしかないでしょう！（後書き）

なんかいろいろ勘違いしちゃいそうな感じの書き方になってしまった。

サイト上でのリレー小説は初めてなので緊張しました。

次は緋紹さんです、よろしく。

ピンチ!! (前書き)

プー太さんよろしくお願いします!

ピンチ!!

護衛を始めて早3日、特に相手の姿を見つけることはなかった。というの、どうもつけてきている気配はあるのだが、シリティアの傍に俺達がいるからか手を出してきたりはしないのだ。

「どうする…」

シリティアの部屋に集まって打開策を考えている。

「手を出すつもりはねえのか？」

「そうだとしたら変な奴だなあ。遠くから見てるだけでいいの？つてやつなのか？」

両拳を顎下で揃えて秋弥が小首を傾げて女声を出した。

思わず笑うとシリティアに殺気の孕んだ視線を向けられた。

「笑い事じゃないよ。ストーカーって本当に怖いんだよ？」

「その通りだ」

紅葉に窘められ肩身の狭くなった俺達を夕花が首肯して追い討ちをかける。

「ストーカーはエスカレートすることが多い。特にこういうパターンは箍が外れると厄介なことになる可能性が高い」

青い膝丈のワンピースから覗く足を組み替えて不満そうに舌打ちをする。

あの、夕花さん？年頃の女の子が舌打ちって有りなの？

「す、すんません…」

「話が出来ればいいんだが…」

夕花が組んだ膝の上に肘をついて、その手のひらに顎を載せた。

「話ができればって？」

「ああ、自分の行動を知られていたとわかった時、どんな行動を起こすかが気にかかってな」

「ど、どんな行動って…」

紅葉が顔を引きつらせる。

シリティアが少し青ざめた表情になった。

「……なんとかしてエスカレートする前に止めるしかないわけか」
その様子に顔を引き締める。

そう。女の子にとって、これは只事ではないのだ。

男と違って無理矢理襲われるということがあるかもしれない。

それはどれほど恐怖を感じるだろう？

「どうする…」

秋弥がポツリと呟いた。

「……少々手荒になるけどいいか」

俺の言葉に全員顔を上げる。

「なんだ？」

「……あくまでこれは提案だから、無視してくれても構わない。

——シリティアに囚になってもらう」

「え……」

全員が絶句する。

「紘斗、それは…」

紅葉が躊躇いがちに口を開いたのを手を挙げて制する。

「わかってる。かなり危険だし、成功するかもわからない。けど、
早めに解決するならこれが一番適していると俺は思う」

シリティアの目を見据える。

「どうだ？シリティア」

「え…」

迷うようにシリティアが瞳を揺らした。

「怖いなら止める。無理強いはいしない。これから先、ずっと俺達が
護衛すればいいだけの話だし、危ないからな」

息を吞んでシリティアが俺を見つめ返す。青ざめた顔が僅かに震えている気がした。

ふっと短く息を吐くと俺を見て唇を噛み締めた。

「——やる。こっ怖くなんかないんだからねっ」

強く拳が握り込まれ、僅かに俺を見上げる。

挑むような眼差しに口元を緩ませた。

「ツンデレきたな」

「つんでれってなんなのよ！！聞いたことない！！」

「いやいや俺達の世界ではメジャーな言葉だよ、なあ？」

「おう！！オタクに人気な女子の態度ベスト10に入るぜ、多分！！」

「おたく？…まあなんだか知らないけど…」

握り込んだ拳を開いてシリティアが僅かに微笑む。

「あ、ありがと」

その場にいたシリティア以外の全員が固まった。

デレがきた……！！

「あ、まあ、世話になってるし」

「そ、そうそう」

なんだか感動に浸っていた俺達を現実に取り戻したのはドアをノックして中に入ってきた奥さんの「夕ご飯ができたわ」の一言だった。

階下に降りて夕飯を食べた後、カウジエさんはすぐに席を立った。

「仕事？」

「ああ、見回りをしないとイケなくてな」

「見回り？」

もとの世界ではあまり使われることのなかった言葉に疑問を持って問いかける。

「最近山賊に襲われた村の話を聞いてな。近くの村だったから、一応用心のために」

「へえ…」

「戸締まりしろよ」

奥さんの肩を軽く叩いて出て行った。

翌日俺達は自分達の戦闘服（要は制服）に身を包んでシリティアの

後ろをついていっていた。

俺と秋弥は後ろを、夕花と紅葉はシリティアを挟んで並んで歩いている。

作戦はこうだ。

3人が仲良く歩いている↓3人が別れる↓シリティア一人になる↓上手く引つかかればストーカー登場↓すかさず俺と秋弥で確保。緊張しているのか夕花以外の2人はガツチガチである。

おいおい頼むぜ？今回失敗したらヤバイことになるからな。

「あ」

シリティアと2人が別れた。

周りを道をして夕花と紅葉は別々のところに身を潜めたはずだ。

反対側の茂みにいる秋弥からサインがきた。

口ぽくで『問題なし！！』と言っている。

秋弥、俺にも見えてるから。絶対言いたいだけだろ。

溜め息を吐いて向き直る。

——しばらく経って固まった体を動かして解す。

やっぱり無理か。

日の暮れかかった空を見上げる。チラッと目を隣へ向けると秋弥が欠伸をしているのが見えた。

流石に不審に思われるだろう。

もう随分と長い間ここに留まっている。

シリティアもそう思ったのか一瞬こちらを振り返って歩き出した。こっそりついていく。

「ほんと、なんなんだよ…」

小さく呟く。

獲物が一人になっているのにどうして傍に行かない？まさか俺達に気づいたのだろうか？

山の中に入って小道を歩く。

薄着だから肌寒い。そういえばこっちは冬だった。

借りていた上着を羽織る。黒の立て襟で、ボタンが金だから、学ラ

ンのようだ。

ふと昨夜の会話を思い出した。

カウジェさんが、山賊が出るかもしれないと、懸念してはいなかったか。

血の気が引いていくのがわかる。

ダメだ！！山賊に比べたらストーカーなんて可愛いものだ！！
今すぐ山から出ないと――。

茂みから出てシリティアに声をかけようと息を吸った時――悲鳴が聞こえた。

「離してよっ！！」

いかつい大男にシリティアが腕を掴まれていた。

「！！シリティア！！」

秋弥が声を張り上げて茂みから抜ける。それを追いかけるように俺もシリティアの方へ走り出す。

頼む、下手な行動をとらないでくれよ。

奥歯を噛み締めて走る。

意外と距離があって、シリティアを引っ張る大男との差がまだある。

「おおっとそれ以上近づくなよ」

大男がシリティアの両腕を背中で拘束して顎に手をかける。

シリティアの顔が嫌悪で歪む。

「！！やべえ！！」

「触らないでよ変態男――！！」

頭を振って顎にかかった指を外すと迷わず――それに噛みついた。

「うわっ」

その行動に呆気にとられ走る足を止めた。

「この……」

大男の顔が怒りで紅潮する。

「なんて女だ！！」

拳を振り上げた。

「まっ、待て！！」

慌てて走り出す。

次の衝撃を恐れてか、シリティアが目を瞑った。

クソッ間に合わな――

シリティアの傍の茂みから誰かが飛び出して大男に体当たりをくらわせた。

そのはずみでよろめいたシリティアをギリギリ掴んで支える。

今の、誰――。

飛び出してきた人物の髪が夕日に照らされている。

大男がよろめいたところにその人物は鳩尾に蹴りをいれた。

その俊敏さに口を開く。

大男が呻いて倒れる。

その人物は、俺達は気づかなかったが茂みに隠れていたらしい大男の仲間を引きずり出して同じように蹴りをいれた。

呻くその仲間にその人物が口を開いた。

「――シリティアに近づくな!! ばーかばーか!!」

……あれ…さっきまでかっこよかったのに。

ピンチ!!
(後書き)

次は夕さん!! ファイトです!!

…誰だ、お前（前書き）

プー太さん、どうもです！

夕、行きます！

…誰だ、お前

騒ぎを聞いてあたしと紅葉が駆けつけると、いきなり登場した男が大男を倒したところだった。

「シリティアに近づくな!!ばーかばーか!!」
なんだ、あいつ…。

大男は起き上がると舌打ちして退散していった。
皆、沈黙して…というより、啞然としてシリティアを支えるその人物を見つめる。

「あれ、誰？」

「…さあ」

一部始終を見ていたはずの絃斗、秋弥に聞いてもふたりとも「知らね」口を揃えてそう言う。

「あの…いつまで支えてるの？私もう大丈夫なんだけど」
シリティアがおずおず尋ねる。

するとその人物は、はっと我にかえってシリティアを離れた。

「――シリティア」

「な、なによ」

シリティアも初対面らしい。

「――シリティア！」

「だから、なによ！」

男の目が輝いている。

なんだ、格好いいのか悪いのかいまいち分からないやつだな。

「シリティアが僕の目の前にいる…！」

「……え」

「あのシリティアが…！」

シリティアはじりっとそいつから離れると、こっちに向かって走ってきた。

男はと言うと、自分の世界に入り込んでいて、シリティアがいなくなったのに気づいていない。

「シリティア、知り合い？」

自分の背中に隠れたシリティアに紘斗が尋ねる。

シリティアはぶんぶん首を横に振った。

「知らないわよ、あんなヤバい人！」

「へ？」

紅葉が間の抜けた声を出した。

「じゃあ、シリティアを知ってて助けに来たんじゃないんだ？」

シリティアがくると向きを変えて歩き出した。

あっちは…家のほうか。

「帰るのか？」

「帰るわよ。ストーカーを捕まえにきて、なんでまたストーカーみたいなのに出会わないといけないのよ！」

まあ、それは気の毒だが。

男を見ようとせずにシリティアはその場を歩き去ろうとするが。

「シリティアー！！！」

やつは笑顔の全力疾走で追いかけてきた。

はつきり言おう、怖い。

「ひ…っ」

追い付くと男はシリティアに手を差し出した。

「僕はヨイチ。シリティア、ずっと大、大、大大好きでした！」

ひきつった顔で男——ヨイチの手をただ見るだけのシリティア。いきなりのことに固まるだけのあたし達。

そして、ひとりだけ期待を込めた目で想い人を見つめるヨイチ。

そうか、こいつはシリティアが好きで助けに出てきたのか。
それにしても一方的すぎるだろう。

「……」

「シリティア」

「……………」

シリティアの顔見ろ。

あきらかにテンションが違うだろう。

「そ、それで、答えは……」

シリティアがいつまでも黙っているからか、ヨイチがシリティアの顔を覗き込んでもう一度手を差し出した。

「シリティ：「無理」

玉砕とは、こういうことをいうのか……。

シリティアが発した二文字の必殺技に、ヨイチは手を差し出したままの姿で銅像のようになってしまった。

「帰りましょ、今度こそ」

「シリティア、あいついいのかー？」

秋弥がヨイチに目をやりながら聞くと、

「いいのよ。だって……ストーカーのこともあるし、第一あの人テンションが怖いんだもの」

テンションが怖いんだもの。

それは夜の村外れにやけに響いてきこえた。

それからまた少したって、あたし達はヨイチのことをすっかり忘れていた。

「そういえば……最近ストーカーはどうなったんだ？」

「ああ、忘れてたわ」

あたしと紅葉、そしてシリティアが村長宅の一階で話していると、紘斗と秋弥が部屋から下りてきた。

「忘れてた……って、もうなんにもないってことだよな！よかったじゃん！」

「一件落着!だな」

おやつにブリオッシュを食べながら、万事屋の初仕事成功を喜んで
いた。

……ときのことだった。

ドアが凄まじい音で開いた。

「……げっ」

「シリティア、偶然だねっ」

そこに立っていたのは、茶髪に赤目の、そうヨイチだった。

…誰だ、お前（後書き）

ごめんなさい、こんなところでやめて。

秋雨さんに任せよう。

仲間が増えた！（前書き）

秋雨です！

プー太さん、よろしく！

仲間が増えた！

偶然って……。

いくらなんでも無理があると思う。

だってここ、シリティアんちだぜ？

「今日も綺麗だね、シリティア！」

ヨイチはオレらのことは眼中に無いらしく、シリティアを見つめて目をキラキラさせていた。

シリティアは紘斗のうしろに隠れる。

「シリティア！？シリティアを離せ！！」

それを見たヨイチは何を勘違いしたのか、紘斗に叫ぶ。
目が悪いのか？

この世界に眼科ってあるのか？
今度探してみるか。

「だってさ、シリティア」

紘斗が笑いを噛み殺しながらシリティアを前に出す。

「ヒロト！？」

どうにかして逃げようとしてるけど、紘斗の力には敵わず、ヨイチの前で固定された。

「ああ、よかった、シリティア！大丈夫？そいつらに何かされてない？」

お前の目は大丈夫か？もう手遅れか？

ヨイチがシリティアに手を伸ばす。

その手はシリティアに叩かれた。

「勝手に勘違いしてんじゃないわよ！ヒロト達は仲間なの！わかった！？」

おお、あのツンデレシリティアからそんな言葉が聞けるなんて！
対するヨイチは俯いてぶつぶつ言っている。

「シリティアが、あのシリティアが僕を叩いた……」

叩かれたことにショックを受けたのか。

と思っていたら。

「か、感激だ！」

嬉しかったらしい。

そのテンションでシリティアに抱きつこうとして夕花と紅葉に成敗されてた。

「ちよつと、話聞いてたの!？」

「もちろんだよ!シリティアの言葉は一言たりとも聞き逃さないから!僕を仲間に入れてください!」

「そう、ならいいわ」

……………ん?

なんか、すっごいナチュラルに重大な事を言ったような……。
で、それを了承したような……。

「本当に!？ありがとうございます、シリティア！」

ほら、喜んでるし。

「ねえ、どうして喜んでるのかしら。べつ、別にわからないんじゃないんだからねっ！」

「オレ知らね」

「俺も」

「あたしもだ」

「クレハは？」

「えつと、ヨイチさんが仲間に入れてほしいって言ったのをシリティアが了承してたよ」

ああ、だからあんなに喜んでるのか。

「ちよつと、私そんなことした覚えはないわよ!撤回しなさい!」
シリティアがヨイチの服を掴んでぐわんぐわん揺すって叫んでるけど、ヨイチは「シリティアが僕に触れてる……うぷっ」とか言ってる上の上の空。

あれ、ヨイチ酔ってないか?

「諦めろ、シリティア」

「そうだよ。たぶん、その人聞いてないし」
たぶんじゃなくて絶対だけどな。

「聞いてんの!？」

シリティアは諦めずに揺すってる。

ヨイチそろそろ限界っぽいぞ。顔真っ青だし。

「さっ、さようならっ！」

やっぱり限界だったらしい。

口をおさえて出ていった。

「ちよっとお!？」

結局ヨイチは仲間入り？

仲間が増えた！（後書き）

お次は紅さん！

頑張れ！

……仕方ないわね。(前書き)

ぷー太さん、よろしくです！

紅です。

……仕方ないわね。

「シリティアー……。……。」

秋弥は呆れた目でシリティアを見る。

「私は悪くないわよ！」

あいつが……。私の話を聞かないからっ……。……！」

うつすらと涙を浮かべるシリティア。

ヨイチさんを相当受け付けないらしい。

「ええ……本当に仲間に入れるのか？」

紘人はみんなとアイコンタクトをとりながら、そう言った。
夕花は小さくため息をつく。

「本人はその気だし……。仕方ないじゃないか。

それに……。人が増えれば、できることが増えるだろ……。……。」

なんだか夕花の笑みが、黒く見えるのは……。……気のせい？

うん、気のせいだと思いたい。

「い、嫌よ！」

なんであんなやつを仲間に……。……！」

ストーカーみたいで怖いじゃない！」

シリティアは夕花をキッと睨みながら、

悲鳴にも近い叫び声をあげる。

たしかにストーカー気味で怖いところがあるけれど、

あの時はシリティアを助けてくれた。

だから悪い人じゃないと思うんだけどなあ……。……。

でもあのストーカー気味なところは、

本気で直したほうがいいと思うけど。

「シリティア、別にいいと思うよ？」

それに断っても来るんじゃないかな、ヨイチさん。」

私がそう言うと、夕花はうんうん、とうなずいていた。

「クレハが言うんなら仕方ないわね……。……。」

本当は嫌だけど。」

シリティアにしては素直だ。

そんなシリティアの言葉を聞いて、夕花が黒い笑顔で、小さくガツツポーズをしていたのを、

私は見逃さなかった。

——一体何をするつもりなんだろう……。。

背中に冷や汗が伝うのを感じる。

ヨイチさんは夕花の手によって、どんな目に遭うんだろう。なんだかヨイチさんに同情しそうだ。

「じゃあ明日から来てもらおう。

それでいいよな？」

今度は爽やかな笑顔で、夕花はそう言った。

……仕方ないわね。
(後書き)

なんかごめんなさい。

次はぷー太さん！
よろしく！

あなたの命令?喜んで! (前書き)

どうも、プー太です。

いやあ…2回目回ってくるのが早かった。
頑張って書こうと思います。

あなたの命令？喜んで！

ふんふんふん。

僕はシリティアの家までの道のりを歩いていた。いや、若干スキップ混じりなのかもしれない。

でもそんな僕の心は複雑だった。

シリティアに会いに行ける上、同じ空間で同じ空気を吸って一緒にお話もできるというイベントで地に足も着かない思いが半分に、いらない奴らに会わないといけないといういらぬオプションが付いてくるせいで気乗りがしない部分があるからだ。

昨日は最悪だった。

あと少しでシリティアの前で戻してしまいそうになった。あいつ等のせいで（実際は違う）。

シリティアは僕がゲロをどこでも吐く変人だと勘違いしてないだろうか…。

それとももっと悪いとらえ方をしてるのだろうか。

…不安だ。こうしちゃられない。

「シリティアー！いま誤解を解いてあげるからねー！」

僕の声は青く晴れ渡った空に吸い込まれていった。

「シリティア！」

「うるさい」

扉が外れるくらいの勢いをつけて部屋に乗り込んだ。

中にはあの4人と、愛しのシリティアがいた。

「シリティア誤解だ！」

「…私がいつ、何を、どう誤解したってのよ。しかもその息切れ気持ち悪いんだけど」

「うわー変態だ。警察！警察を呼ばねえと！」

「秋弥この世界に警察なんていないんだ」

シリティアの前に男共が立ちはだかり壁を造るが蹴散らしてやった。愛に勝るものはこの世に有りはしないのさ！

「ああシリティア：そんなつれないところも素敵だ」

手を取って甲に口付けをしようとしたところを交わされて、一瞬のうちに手を踏みつけられた。

手を踏まれてる…。

うわあ、足のラインがなんて美しいんだ…。

「なんなんだコイツ。ヨイチじゃないぞ、ただの変態だ！」

「そうだな。それが正しい」

「二人とも、真似して踏もうとしちゃ駄目だから！」

「君たちは黙っててくれないか。集中できなじゃないか」

「何にだよ」

全く騒がしい奴らだ。邪魔ばかりしていったい何がしたいんだ。

「ユーカ…」

顔をしかめて小さく呟いた彼女はなぜか泣きそうになっていた。それを見ていままでだんまりを決めていた女がこっちに歩いてくるとニツコリと黒い笑顔でほほ笑むとシリティアに耳打ちをした。

「…わかった」

で、その後になぜかそいつにも手を踏まれた。しかも全体重をかけて。

「いたたたたっ」

「もう一度言う。うるさい」

そして、もう一度強く踏むと絶対零度の笑みを浮かべて僕を見降ろした。

ぶるり。

背筋がゾクゾクした。冷や汗が滝のように流れ出るほどに。

それはそれはもう恐ろしかった。息をするのを忘れてしまうくらいに。

「次はない。…わかったね」

「は、はい！」

「うわゝ魔王降臨」

その時理解した。こいつだけは怒らしてはいけない、と。

踵を返してベッドに倒れこむと魔王は眠りについたようで小さな寝息が耳に届いた。

「…おい」

「なんだあいつ…人間じゃない…魔王だ…漏らしたらどうしてくれるんだ…」

「おい！」

しまった！話しかけてくれるとは思っていなかったからシリティアの言葉を聞き逃してしまふところだった。危ない。

一言も聞き逃さないよう全神経を耳に集中させた。

「お前、仲間にしてやったんだから私の言うことに逆らわないこと」私の言うことに逆らわないこと？もちろんだとも！

君の為なら火の中水の中…どこへでもお供するに決まってる！

「いい？」

「はい！」

「なら…お前は私の下僕に決定！これで一件落着！」

「よろこんで！」

シリティアが僕を下僕にしてくれるなんて夢みたいだ。

思わず涙が溢れてきた。

「マゾだ…紘斗、俺初めて本物をみた…」

「心配するな俺もだから…」

「一生ついていく！絶対ついていくからね！」

——そんなこんなで僕は名誉なことにこの2日でシリティアの下僕となり、以前は見つめることしかできなかった生活が終わった。

こんなに嬉しい出来事は二度とないだろう。

心の底から強く思う。

あなたの命令？喜んで！（後書き）

本末転倒ってこのことをいうんですね。

場違いな気がしてきました…。

なので、次回はちゃんとできると嬉しいです！

ベントス

「——ベントス小屋の掃除？」

ダイニングで塩漬け（塩に似たもの漬け）した肉を焼いて濃い青のソースをかけたものを頬張っていた俺はカウジェさんの話に顔を上げた。

この食べ物を初めて見た時はソースの色にドン引きしたが、食べてみると意外に甘く、肉とよくあった。何かの木の実の汁にスパイスを混ぜて煮たものらしいが、それにしてもこの色はどうにかならないのだろうか。慣れればなんてことはないが、慣れるまで食欲はおねんねしてしまう。

「そうだ。ベントスが何か知ってるか？」

「いえ：知らないっす」

秋弥がゴクリと飲み込んでから答える。

「生き物ですか？」

紅葉が首を傾げて訊いた。

「ああ。田畑を耕す時や、荷物を運ぶ時によく活躍するな」

てことは、牛とか、馬みたいなものか？

秋弥もそう思ったのか「乗りてえええ！！」と拳を握っている。

「見た目は——って言ってもわからんだろうな、見てみるか？」

「是非」

夕花がグラスに入った水を一口飲んで頷く。

「お父さん、私も行くから」

シリティアがフォークを置いて必死のオーラで言った。

「え？お前あんなに行きたくないって言ってたじゃないか」

「そりゃあ今だって行きたくないわよ！！べっ別に怖いわけじゃないんだからね！！」

怖いんだな。

シリティア以外の4人もそう思ったのか温かく笑っている。

「で、でもっあいつが付きまどってくることに比べたらっベントスなんて可愛いものだわ!!」

「あいつ?」

カウジェさんが首を傾げる。

もしかして、カウジェさんは知らないのだろうか。

ヒヤリと汗が流れ落ちた。

あいつ、最大の関門の目を欺いて、何度も何度もここに来てたってことか…?

すげえな!!

「いいから早く行きましょ!! 早くしないとあいつが——」

「シーリーティーアー!!」

ダイニングのドアが勢いよく盛大に音をたてて開いた。

「来ちゃった……」

今の一瞬でゲッソリとシリティアが痩せたように見えたのは気のせいか。

「おはようシリティア!! 今日可愛いなあ!! 素敵だ!! その燃えるような赤い髪が煌めいて見え、ぶっ」

勢いよく開いたドアが跳ね返りヨイチの顔面にヒットした。

「ううう痛い…くっこのドアめ、僕のシリティアへの愛を邪魔するつもりだな!? ふんっ負けないぞ、愛は勝つんだからな!! 愛してるよシリティアー!! あれっなんか星が飛んでる? すごいねシリティア!! 君の輝きのせいで星が霞んで見えるよ!!」

「そう、なら家に帰って大人しく寝てたらいいいじゃない。そうよ、そうしなさいよ」

そう言いつつシリティアが俺の背に隠れる。

「そういうつれないところも好きだよ!!」

ヨイチの笑顔が輝く。

うわおシャイニング!!

顔だけ見たら誰にも負けないほどかっこいいのに、残念だ!!

「お前は？」

ハッと我に返って、そういえばカウジェさんがいたことを思い出す。どうすんのーどうすんのーヨイチー！！

パチクリとヨイチは目を瞬かせ、その次の瞬間――土下座した。

「シリティアを僕にくださいいいいい！！」

「えーーーーー！！」

思わず秋弥と声を上げる。

「ダメだ」

「えーーーーー！！」

そこ冷静に返しますかカウジェさん！！

再び声を上げるとうるさいと夕花に叩かれた。

「夕花、だつてさ！！」

「気持ちにはわからんでもないが、とにかく落ち着け」

「そ、そうだな」

頷いて落ち着けと呟く。

「なんでですか！！こんなに僕はシリティアを愛してるのに！！」

「そのシリティアが嫌がつてるだろう。ダメだ。で、名前は」

「ヨイチです！！」

不服そうに口を尖らせながら、しかし律儀に答えた。

「ヨイチ？もしかして武大会で話題になってた奴か？」

「話題？いえ、知りませんが、武大会には出ました！！」

絶対その話題になった奴だ。

通りで山賊をあんなに簡単にのしてしまえてたのか。

「まあいい、とにかく許さん。出てけ」

シッシツと手を振る。

「すいません、彼もベントス小屋のところに連れて行きたいんです」
夕花がズイッと体を前に出してニツコリ笑った。

黒いよ！！営業スマイルか！！

「なんでだ」

ムツとした顔でカウジェさんが返す。

ちょっと頼むよ夕花ー！！置いてもらってる身なんだからな！！
「彼もあたし達の活動要員なんです、シリティアには近づけないようにしますから」

「ええ！！」

ヨイチの不満の声は夕花の笑顔に一蹴された。

「ダメですかね？」

「……シリティア、お前は」

「ユ、ユーカがそう言うなら」

「なら、いい」

えーえーえー！！

ベントスはぶっちゃけアルパカでした。

茶、白、黒とかいろんなのがいて元の世界より大きくて、お城の騎士さんもお乗りになるとか。

毛はサラサラ、びっくりすることに耳が寝ている。

しかも髭が猫のように生えている。

「なかなか可愛いじゃないか」

夕花がベントスの頭を撫でる。

「可愛い」

紅葉がベントスに抱きつく。

「シリティアも触ってみれば？」

「え？」

ベントス小屋に入ってからずっと俺の後ろに隠れていたシリティアに促した。

顎でベントスを示すときゅっと唇を固く結んだ。

「そっ、そうね」

恐る恐る手を伸ばしてベントスに触れる。

固くしていた肩がほっと緩む。

「ちよっと…か、可愛いかも…」

「よかったな」

ベントスがシリティアの手に頭突きする。

「ぎゃあ!!」

シリティアが悲鳴を上げて飛び退く。

——それを見てシリティア以外の4人は盛大に笑ったそう。

ペンタス（後書き）

次は夕さん！

小屋掃除（前書き）

更新が遅れたことを深くお詫びいたします…。
進学関係が…すみません、言い訳です。

夕、参ります。

小屋掃除

ベントスという生き物、動物は基本的に馬と同じような世話をすればいいらしい。

あたしは馬の世話もしたことがないが。

「まずは…古い藁を掻き出すんだっけ？」

「そうだ」

ひとり1つずつ熊手によく似た道具を渡された。
なるほど、これで藁を集めるのか。

「これ、結構重いね」

熊手もどきをずりずり引きずりながら、紅葉が隣に立った。

「確かに」

ふと見ると、シリティアも苦戦しているようだった。

地面に綺麗に三本の線が描かれている。

「よっし！やるか！」

「燃えてきたーあっ！！」

「シリティアー！見ててね！僕の勇姿を！」

それに比べて男性陣は、熊手もどきを軽々持って、気合い十分といったところ。

まあ、不本意だが、さすが男と言っておこう。

ひとりずれてるやつがいるのは、気にしないで。

掃除の勇姿とはどんなのだ…？

「あたし達もやるか」

「そうだね。うん、頑張ろう！」

「本当に私もやらなきゃ駄目？…べ、別に怖いわけじゃないのよ！？」

小屋の中にまだベントスがいるからか、シリティアはもうすであたしと紅葉の後ろに隠れている。

「それじゃあ：俺は村の方へ顔を出してくる」

村長がしばらくしていなくなると、残されたのはベントス小屋の掃除初経験者のみとなった。

男三人が先に小屋にのりこむ。

「よつと：こうしてベントスを避けながら掃除すればいいんだな」

秋弥は早くもコツを掴んだようだ。

それは紘斗も同じ。

「あたしも」

ベントスの間を縫って小屋の奥にやつとのことたどり着く。

こいつら、無駄にでかいな。

熊手もどきで藁を集める：のだが、これが意外に難しい。

「……」

上手く集まらないうえに、少しでも気を抜くとベントスが後ろから突っ込んでくる。

しかも、なんだよお前、みたいな顔で不機嫌に鼻を鳴らす。

そんなこんなをしているうちに、藁は集まらないのに、あたしは汗だくになっていた。冬に近いはずなのに。

「ひゃあっ！」

汗を拭ったとき、ベントスの向こうからシリティアの悲鳴に近い声が出た。

回り込んでみると、シリティアが二頭のベントスに挟まれていた。

「な、なによ！私になにか文句があるの！？」

シリティアは必死に追い払おうとするのに、ベントスは興味津々といったように、シリティアに顔を近づける。

「~~~~っ、ヒロト！シューヤ！助けなさいよ！」

「助けろって言われても……」

手綱も紐も付けられていないベントスは、その巨体のせいもあって、簡単に動かせるようには見えない。

何も出来ずにいたところへ、ヨイチが顔をあげた。

「シリティア見てた？今の僕のテクニク！」

なんでまだ掃除してるんだ。

「見てないわよ！もうっ！あんたでもいいからなんとかして！」

「ベントス二頭とシリティア…。はっ、さすがシリティア！君は動物までも虜にしてみうんだね！！」

「いいから助けて！助けなさい！」

そこでようやくヨイチが自分の世界から戻ってきた。

片方のベントスに飛び乗って、横腹を軽く蹴る。

するとベントスはあっさりその場から数歩進んで、シリティアは二頭の間から脱出したのだった。

いつもは、ああなのに、やるときはやってくれる。

「た、助かった…」

「大丈夫？シリティア」

よほど怖かったのか紅葉につかまりながらシリティアは涙目になっていた。

「シリティアー…ん？」

シリティアが涙をためているのに気付いたヨイチ。

「どうしたんだい、シリティア！…そうか、僕に助けてもらえて泣くほど嬉し…ぶっ」

シリティアの鉄拳がクリーンヒット。

ヨイチは腹を抱えて大人しくなった…はすが、なぜか嬉しそう。

そんなヨイチを横目で見て、シリティアが小声で言う。

「別に、ありがとうとか思っていないんだからね…っ」

それがヨイチに聞こえていたのかは分からないが、その後ヨイチは絶好調で、小屋掃除をほとんどひとりでこなしてしまった。

小屋掃除（後書き）

次、秋雨さんです。

ベントスに乗ろう！
(前書き)

遅くなってすみません

秋雨です！

ベントスに乗ろう！

今日も今日とてベントス小屋へ。

初めて小屋掃除をしたときからずっと来ている。
と言っても二日しか経ってないけどな。

「あー、ベントスいいなー」

「あれを乗りこなせたらスゲェよなー」

「なんだ、ベントスに乗りたいのか？」

ボソツと言ったのがカウジェに聞こえてたみたいだ。

「あれに乗りたいの！？」

少し離れた所で夕花と紅葉の後ろに隠れているシリティアが信じられないみたいなの顔してる。

オレはベントスが嫌いなお前が信じられない。

「ああ、怯えてるシリティアも可愛いよ！」

ヨイチがシリティアに飛びつこうとして夕花に殺られていた。

そのあとカウジェがどっかに放り投げた。

なんというコンビネーション。

そしてヨイチ。学習しろよ。

「さて、何の話だったか……」

「ベントスベントス！」

「ああ、そうだったな。乗りたいなら乗ってもいいぞ」

「本当ですか！？」

「サンキュー、カウジェ！」

心優しいカウジェがベントスを二頭連れて来てくれた。

「ベントスを乗りこなすのはコツがいるからな。まあ、頑張れよ」

「教えてくれねえの？」

「技術は盗むものだ」

無駄にカッコいいことを言い残してカウジェは消えた（ベントス乗りに行っただけ）。

「とりあえず乗ってみるか」

「だな」

首に繋いである手綱を掴んで背中に飛び乗る。

「…………お？」

意外に大丈夫？

紘斗は乗るのに苦戦している。

飛び乗れば簡単なのに。

乗ったのはいいけど、ここで問題が。

「どうやったら進むんだ？」

手綱を引っ張ればいいのか？

引っ張るとベントスが苦しそうな声を出すだけ。

さあどうしよう。

「シリティア、隠れるなら僕の後ろにおいで！」

おっと、後ろからいなくなったはすの奴の声が聞こえる。

…………ん？ヨイチって確かベントス乗りこなしてたような……………。

「ヨイチー、ちょっと来てくれー！」

「僕はシリティア乗り頼み以外聞かない！」

「いいから行ってきたさいよ！」

「はーい！」

恐ろしいほどシリティアに従順だな…………。

シリティアは怒りすぎでツンの欠片もないし。

「で、何？」

明らかに態度が違う。

教えてくれるか心配だな…………。

「ベントスってどうやったら動くんだ？」

「ベントス？それなら腹を軽く蹴れば…………」

意外にも素直に答えてくれた。

「サンキュー」

軽く、軽く。

意識しながら蹴ってみる。

するとベントスはゆっくりと歩きだした。

「う、動いた！ベントス動いた！」

「きゃあっ！こっち来ないでよ！」

夕花達の方に行ったらシリティアに逃げられた。

「待て、シリティア。ベントスは移動手段なんだろう？克服しないと遠いところに行けないぞ」

「それはそうだけど……」

「シリティアと買い物とかしたかったな……」

「そういう訳だ、行ってこい」

夕花と紅葉に押されながらシリティアはベントスに近付く。

「……………やっぱ無理！」

「そんなシリティアもかわいぐふっ！」

最後まで言わずにヨイチは紘斗が操るベントスに蹴り飛ばされた。

シリティアのベントス嫌いは治らねえのか？

ベントスに乗ろう！
(後書き)

次は紅さん！

ファイト！

ベントス克服しますか。(前書き)

紅です。

相変わらず緊張します。

そして相変わらぬ駄文です。

ベントス克服しますか。

翌日・ベントス小屋。

「むっ、無理っ……！」

シリティアは私と夕花の服を掴みながら、私達の後ろに隠れる。

「シリティアー、ベントスに乗れたらカッコいいよ？」

「そうだぞ、シリティア。というより、乗れないとダメだろ。」

私と夕花は、シリティアにベントスに乗るよう、促してみる。

「シリティアがベントスに乗れたら、カッコいいだけじゃない！
かつこよさと同時に、かわいさにもじみ出てそれはもう魅力が」

『黙れ。』

私とヨイチ以外の人が、一斉にヨイチへ冷たい一言を言い放った。

「シリティアに命令されるのはいい……むしろ快感だ。」

しかしお前らに命令されるのは気がくわない！」

『はいはい。』

またもや冷たくあしらわれるヨイチ。

——どうしてこんなに不憫な人なんだろう……。

——3時間後。

「無理無理無理！」

なんとかベントスに乗れるようになったシリティアだけど、なかなか乗りこなせないまま、現在に至る。

「大丈夫だシリティア！」

ベントスに乗れているんだ！

あとは進ませるだけだ！」

「シリティア、軽く蹴るんだ！軽くだぞ！」

紘斗と秋弥がシリティアを応援している。

私と夕花はヨイチがシリティアに近づかないよう、見張っている。
夕花がいるせいか、ヨイチが少し小さく見える。

「きゃあああああ！」

『シリティアー！』

そしてシリティアの悲鳴と2人の叫び声が聞こえた。
駆け出すヨイチを私達は必死に抑える。

「はあ……なんでこうもお前は学習しないんだ？」

夕花は呆れた口調でそう言った。

愛は盲目とは言うけれど……ね。

「…シリティアを愛しているから。

それだけだ。」

いつになく真剣な声色で、ヨイチはそう言った。

「ん？お前らしくないことを言うな。」

夕花は驚きを見せる。

それは私も同じだった。

こんな真面目なヨイチを見るのは、初めてだ。

「おお！シリティアー！」

「やっ……やっに乗れたな！」

「べっ別に嬉しいとか思っていないんだから……っ。」

素直になれないシリティアを見て、微笑むヨイチ。

そんなヨイチの表情には幸せが溢れ出ていた。

「だからシリティアだけは守り通したいんだ。」

なんかヨイチがかっこいい！

真面目ヨイチ、激レアすぎる！

そんなヨイチに言いたいことは山ほどあるのに……

『……………』

私達は言葉が出てこなかった。

一方的に押し付けられている愛だけど、こんなに想われているシリティアは幸せ……

「ああ、シリティアおめでとう！」

今の君は以前より輝きを増して、
とても綺麗で魅力的だよ！

この美しさは罪だ！

だから僕と結婚してください！」

「うるさいわよ！ 黙りなさい！

そして無理やり結婚の話に持ち込まないで！

どこの誰があんたと結婚するような関係なわけ？」

……じゃ、ないのかもしれない。

ベントス克服しますか。(後書き)

……ヨイチかっこいいのか？
とりあえずごめんなさい！

プー太さん、よろしくです！

ベンダスのバカヤロー（前書き）

遅くなってすみません。

プー太です。

今回こそはッ！てな感じでいっきまーす

ベンダスのバカヤロー

シリティアがベンダスに乗った次の日。シューヤとかいう僕になにかと突っかかってこようとする奴の一言で本日の予定がガラリと変わった。

今日こそは僕の華麗な藁捌きで惚れさせてしまおうぞ。

そう意気こんで来たのはいい。

なのに、だ。

「きょーは、ベンダスで競争だー！」

「それいいかも。実は走らせたかったんだよな」

「は！？ちょちょちよつと！別に怖くなんてないけどいきなり過ぎるわよ！」

「……午前中だけならいいと思う。けど、午後は掃除だからな」

『やったー！』

シリティアの美しさに見惚れている内に勝手に決められた。

「じゃー、しゅっぱーつ」

「ベンダスってどのくらいの速さで走るんだろ……」

ということで、急遽変更。

藁捌きじゃなく、ベンダスを華麗に乗り回す姿でイチコロにすることにした。

シューヤの提案だったというのは気に食わないが仕方ない。

あれから一人一頭のベンダスを連れて村の外れのひらけた平地に移動した。

「言うこと聴きなさいよ！」

「そういう時はね、こうすればいいよ」

「ヨイチ、セクハラしようとしなない！」

「失礼な！僕は純粹にシリティアのためにを思っの行動だ。君は黙っててくれないか」

なかなか思った通りに乗りこなせないで困惑した表情がまた美しい。邪魔ものがいるのが大きな壁になる。

なぜ、僕がシリティアの半径2メートルに入った途端に邪魔をしてくるんだ。

——こうなったらアレしかない。

「お前たち、僕と勝負しろ！僕が勝ったら二度と僕とシリティアの邪魔をしないと誓ってもらおう」

「可笑しくないかそれ」

「のった！ルートはどうするんだ？」

「この先に一本の千年樹があるそこを折り返して、ここに帰ってくる。異論はないな」

「おう！」

「あるに決まってんでしょ！」

つい熱くなってシリティアの意見を聞き忘れるところだった。

「シリティアの言葉ならなんでも聞くよ。一秒でも一言でも多く……」

「私も参加するわ！私の事なんだから権利はあるはずよ。絶対負けないんだから！」

でも、シリティア……君ってベンドスに乗ることで精いっぱいなんじゃ……。

そんな言葉は、強い意志の籠った瞳をみてしまっただけ言えるわけなかった。

「——よい……ドンッ」

僕の隣——ユーカを挟んだ——にいるシリティアを気にしながら僕はベンドスを蹴った。

初心者のかせに男二人は勘がいいらしくなかなか引き離せない。常に斜め後ろについてくる。

千年樹が見えてきた。

抜かされることなく折り返し地点を通過した。

そこでシリティアと擦れ違う。

ほんの一瞬だけの出来事だったが、変な違和感を感じた。
違和感を抱えたままゴールに向かって走る。

「んにゃろー！加速だ、風になるんだベンドス！」

「秋弥変なこと言うなよ馬鹿！」

左を見ればシューヤが並んでいた。

――負ける！

少し強めにベンドスを蹴って加速しようとした時、悲鳴が耳に届いた。

誰か、なんて考えなくても分かる。あの声は――。

「シリティア！」

方向転換をして逆走していく。

「ベンドスに振り落とされないように？まってるんだ！今助けるから！」

蹴り処が悪かったのか、ベンドスが飛び跳ねるように暴れていた。
振り落とされないように必死にしがみ付いているみたいだが、長くはもたないだろう。

「手を伸ばすんだ！」

「いやあああああ！」

手を伸ばしていると、そこに振り下ろされたのは暴れ狂うベンドスの足。

ベキッと木の折れる時に出る音がして、意識を飛ばしてしまいそうになるほどの激痛が走った。

歯を噛み締めてもう片方の手でシリティアを掴んで引き寄せた。

その弾みでバランスを崩してシリティアと一緒に地面に落下した。

今思えば僕が全部悪い。

護る。そう言ったのは僕。なのに、なんだこの有り様は。

――ごめんね。

後悔に苛まれながら僕は謝ることしか出来なかった。

ペンダスのバカヤロー（後書き）

今回はただ単にヨイチをカッコつけさせたかっただけでした。
上手く書けているか不安です。

次、緋紹さんよろしく

俺達の憂鬱（前書き）

緋紹です！

俺達の憂鬱

最近、身の回りがやけに静かだ。

いや、それはとても喜ばしいのだが、歩く騒音がなくなったらな
ったで何やら変な感じだ。

それはみんなも同じなのだろう。

シリティアがベッドの端に座って窓の棧に肘をついて溜め息をつく。
今日は纏めていない髪がさらりと揺れた。

それを慰めるように紅葉が背をさする。

夕花が眉を顰めて壁にもたれている。

「なーんか変な感じだよなー」

秋弥が胡座をかいたその脚に肘をついて言った。

うん。わかるぜ。急にイヤホン外された気分だよな。

「何があった：ヨイチ：」

——そう。あれから3日。

シリティアが馬から落ちそうになったあの日以来、ヨイチは俺達の
前に姿を現していない。

途中でベントスを止め、引き返していた俺達の前に、ゆっくりとヨ
イチはベントスに乗ったまま歩み寄ってきた。

顔面蒼白になって震えているシリティアの肩を抱いて険しい顔をし
ていた。

『……ヨイチ：』

ハッと我に返って、弾かれたように顔を上げた。

『シリティア、怪我は？』

ヨイチがシリティアに優しく問いかける。青ざめながらもシリティ
アが首を横に振った。

『……そっか：よかった：』

ヨイチが小さく笑う。その笑みが、どこか自虐的に見えたのは、今

思うと気のせいではなかったのだろう。

『シリティア、僕のベンタスは今少し興奮してるんだ。多分、大丈夫とは思うけど、念の為あいつらのベンタスに乗ってほしい。平気？』

シリティアが頷く。

ヨイチが先に降りてシリティアが降りるのを手伝った。——その時。

『うっ…』

シリティアを支えたヨイチが呻き声を上げた。シリティアを降ろすと数歩後ろによるめく。

『ヨイチ？』

『…な、なんでもな…』

ヨイチが唇を噛む。

尋常な様子ではない。秋弥もシリティアもそれに気づいてヨイチを訝しむように見た。

『おい…』

何があったと訊こうとして、気づいた。

片腕と、その腕を押さえた手が震えている。押さえられている腕は赤く見ていて痛いほどに腫れていた。

『お前…これ…!!』

『紘斗？』

秋弥には見えていないのか不思議そうな声を出した。

これ、絶対に骨が折れている。——もしかして、ベンタスにやられたのか？

『なんでもない!! さっさとシリティアを村長のところへ連れて行けバカ!!』

ヨイチの台詞に気付いたのか秋弥がシリティアに手を貸して自分のベンタスに乗せた。

『ヨイチ、お前…』

『行け!! シリティアにもしものことがあったらどうするんだ!!』

秋弥が口を噤んでベントスの横腹を蹴った。

段々離れていく秋弥達をしばらく見て、ヨイチの方を向く。

向いてから——ギクリとした。

さっきまで立っていたのに、膝をついて、荒い息をしていた。体全体が大きく震えている。

『お、おい…』

俺の言葉にも反応せず、強く赤く腫れた腕を握った。

青ざめて、虚ろな目。

もしかして、これは相当酷いのではないだろうか。聞いたことがある。折れた部分は、少し動かすだけでかなり痛いのだと。

添え木を探して適当なものを見つけると衣服を裂いた。

すみません、カウジェさん。緊急事態です。いつか、ごっそり返します。

細く切るとヨイチの腕に慎重に触れる。

『——っ!!』

ビクリとヨイチが体を揺らして俺を見る。

その目に、腕だけじゃない、それ以外からの痛みを見た。

『じっとしてろ』

『…な、何…を…』

『応急措置だ。村に戻ったらちゃんと手当てを受けないと…』

添え木を当てて即席の包帯で縛る。時折ヨイチは呻き声を上げていた。

『これでよし…。立てるか?』

『……ああ…』

『これからは歩いて帰るしかなさそうだな』

俺の言葉にヨイチが反応する。

『どうして? 僕は平気だ、ベントスに乗れる』

『寝言は寝て言ってくれ』

『はぁ!?!』

自分の声が響いたのか僅かに堪えるように眉を寄せる。

『いいから、歩くぞ』

やはりただの強がりだったのか黙って付いて来た。しばらく歩いていたが、俺達に会話はなかった。

『……何があったか知らないけどさ』

俺は歩く騒音がやけに静かなので、さっきの、痛みを堪えているような目を思い出した。

なので、つい、励ましてしまった。

『そんなに考えこまなくてもいいと思うぜ』

『……僕は約束を守れなかった』

『え?』

『……守るって、言ったのに』

その言葉につい足を止める。

こいつは、そんなことを気にしているのか。俺なら、腕が折れた時点でお互い様だと思っているだろう。

『ヨイチ……』

俺の言葉に反応せず、ヨイチは歩いていってしまった。

——それから3日、ヨイチは姿を見せていない。一度もだ。ふうと夕花が溜め息をついた。

「ここにもいても仕方ない。行くぞ」

「行くなって……どこに?」

紅葉が躊躇いがちに夕花に尋ねる。

「ヨイチのところだ」

俺達の憂鬱（後書き）

次は夕さん！

シリティアとヨイチ（前書き）

遅くなりました。

進学やらなんやらがありまして：

いえ、これは決して言い訳ではありませんよ。

そんなわけで、夕です。

シリティアとヨイチ

このままここでジメジメしていてもなにも変わらない。
向こうが来ないなら、こっちから行ってやれ。

「シリティア、行くぞ」

「ちょっと…ユーカ…っ」

ため息を連番していたシリティアを立たせる。

赤い髪がふわりと揺れた。

あー…ここにヨイチがいたら、また「綺麗だ!」とか何だとか言い出すだろうに。

「大人数で行ってもなんだし、ここは女子だけでいかない?」

紅葉がシリティアと腕を組みながら言うのと、秋弥がガタンと立ち上がった。

「オレも行く!!」

「でも、秋弥はヨイチとケンカになるでしょ?」

「オレ、ケンカしねーし!!」

こら、ヒートアップするな。紅茶に波がたってる。

「オレがいつヨイチとケン「じゃあ、行ってくる。紘斗、留守番と秋弥を任せた」

むくれるシリティアを促して三人で玄関を出る。

後ろで「オレもー!」とか「落ち着けー!」とか陶器が割れる音が聞こえたのは気にしないでおう。…村長ごめんなさい。

「シリティア、ヨイチの家まで案内してくれ」

「任せなさい。私は村長の娘、この村のことなら全て把握してるわ」
シューストン村自体はあまり広いとは言えないが、家と家の間に道

が複雑に絡み合っている。

たいぶここに慣れたと言っても、まだ不安なところもある。

「こっちだったかしら？」

いきなり細い道に入る。

「そういえばシリティアとヨイチって…あ、そうか初対面だっけ、この前のが」

「ええ、初対面よ。でも、一度もお父さんと訪ね訪ねたことがあるの。ヨイチがいたかは覚えてないけど」

「それじゃ、前に会ったことあるのかもねっ」

細い道を抜けるといつもゼファロス達と遊んでいる広場に出た。こんなところからも来れたのか。

「今度はこっちだと思うわ。まったく、面倒なところに住んでるわね」

広場に出たと思うと、また細い道に入る。

「で、この道を入れて…えっと…」

ぶつぶつ言っているシリティア。

あたしは紅葉と顔を見合わせる。

「あたしは無事にたどり着ける気がしなくなってきたぞ」

「あはは…村長さんに教えてもらえばよかったかな…」

それでも必死に道順を思いだそうとしているシリティアの邪魔をすることは出来なかった。

そして10分後。

「自分の村で迷いますか」

「まあまあ、夕花…怒らないの」

怒りマークを浮かべるあたしを紅葉がなだめることに。

「ほ、本当にこっちであってるとんだからっ！！…たぶん」

そんなことを言っても、うろろうその場で回るだけだから説得力がない。

あたしはその場にしゃがみこんでため息をついた。

「シリティア、お前ほんとに方向音痴か？」

「そんなことないわよっ！」

周りをぐるりと見ると、ここは村の中でも端のほうらしい、太い杭が何本も刺してあるのが遠くに見えた。

あたし達が初めてこの村に来たときのような山猫が来るのを防ぐためかもしれない。

こういう見慣れない物を見ると、やはりここが異世界だと言うことを思い知らされる。

「どうする？とりあえず、村長さんの家まで帰って……」

「大丈夫よっ！」

ほとんど涙目になって言い返すシリティア。
何をそこまでむきになっているのだろう。

「ヨイチの家まで行かないと……」

ヨイチ……？家を出るときまでは嫌がっていたのに。

確かにヨイチの家にたどり着くのが目的だが。

「シリティア……」

「どうした？」

さっきまでうろうろしていたシリティアが、急に立ち止まってうつむいた。

「ヨイチがああなったのは……私のせい、だから。私が、乗れもしないのに、ベントスに乗りたいたか言ったから……」

そんなシリティアを紅葉が支えて、どう声をかけようかとしている。あたしもなんと言ったらいいかわからない。

「会って、ちゃんと謝りたい……」

——と、砂の擦れる音がした。

目をそちらに向けると、一段高くなった畑に見慣れたあの顔が立っていた。

「————シリティア……」

シリティアは気付いていない。

あたしと紅葉は気づいた。

そう、そこに立っていたのは、ヨイチだった。

シリティアとヨイチ（後書き）

秋雨さん、お待たせしました。

新しい依頼は……（前書き）

遅くなつてごめんなさい、秋雨です。

新しい依頼は……

あー、気になる……。

気になる気になる気になる気になる……。

「秋弥、そろそろ止まれ」

「だってよ、気になるしさ」

「俺も気になる。お前の変な動きが」

オレはさっきから部屋の中をうろうろしたりドアを開けたり閉めたりしている。

そのどこが変なんだ。

「変じゃねーし」

「……………はあ」

ため息!?

「とりあえず、止まろうか」

「……………おう」

しぶしぶソファーに座る。

でもやっぱり落ち着かない。「よし、尾行しよう」

「ちょっと待て」

立ち上がったら間髪入れずに紘斗の手が伸びてきた。

「どこからその結論が出た」

「ここから!」

指差したのは頭。

「間違っではないけどな、尾行はやめようか」

「何だよ! 思い立ったらすぐ行動、善は急げって言うだろ!？」

「そりゃそうだけど……」

うーん、と考え始める紘斗。

考えなくてもいいのに。

「秋弥、俺達が居なくなったらここには誰も居なくなる」

「……………? まあ、そうだな」

「誰も居ないときに依頼人が来る。さあどうする？」
そりゃあ……。

「書き置きしとけば問題ない！」

「……あのなあ、急ぎだったらどうするんだ」

「あ……………」

確かに……。

「……………オレ、ここにいる」

「よし、よく言った」

どこか満足気な紘斗の顔。

まさかオレ、いいように丸められた？

「なあ紘斗……」

「「兄ちゃん！！」」

オレの声に被るように子供の声が聞こえた。

あれ、あいつら泣いてね？

「兄ちゃん！！」

「早く出てきてよー！！」

やっぱり泣いてるし。

「秋弥、お客さんだ」

「おっし、行くぞっ」

ドアを開けて外に出る。

「「うあーん！！」」

「ぐふうっ」

出た瞬間に子供達に突進された。

いや、本人達は抱きついたつもりだろうよ。

でもな、オレにとっては突進だ！

腹痛え……。

「どうした？何があった？」

ちっちゃかりオレの後ろに逃げてた紘斗が優しく聞く。

「で、出たあ」

「何が？」

「おっ、おぼっ」

「おぼあ？」

おぼさんでも出てきたのか？

「おぼっ、お化けえ！」

「「お化けえ？」」

この世界にもお化けがいるのか。

「うーん……」

どう対処するか困っている絃斗。

「見間違いとかじゃないか？」

「おれらちゃんと見た！」

「僕もっ！」

わたしもぼくもと手が上がってく。

「こんなに目撃者がいるんだし、探してみれば？」

嘘ついてなさそうだし。

「そうだな。どんなのだった？」

「白かった！」

「あとね、大きかったの！」

「どのくらいの大きさ？」

「このくらい！」

女の子が手を使って表そうとしている。

「もっと大きかった！」

と、こんな感じて情報を得た。

さて、まとめてみよう。

「お前らが見たお化けは白くてものすごくデカイ。間違いないな？」

「うんっ！」

「早く見つけてよ？」

「任せとけ！」

お化け探しの始まりだ！

新しい依頼は……（後書き）

次は紅さん！

よろしく！

戻ってきて（前書き）

紅です。

遅くなつてすいません。

いろいろあつたんです、はい……。

戻ってきて

「よ、ヨイチ……！」

私は小さな声で、そうつぶやいた。

夕花も驚いているようで、目を見開いている。

「え……？」

気付いていなかったシリティアは、夕花以上の驚きを見せた。

そして足がもつれそうになりながらも、ヨイチに近づく。

そしてヨイチの両肩を掴んだ。

「なんで……？なんで最近ぱったりと来なくなったの？」

私がああなったのはヨイチのせいじゃなくて……

だからヨイチは責任を感じる必要は無いの。

だから戻ってきたらいいじゃない。

誰もあんたのことは責めてなんかいないのよ？

だから……」

あのシリティアが素直に伝えようとしている。

ちゃんと目を見て、まっすぐに。

いつものヨイチだったら、嬉しすぎて踊り出しそうなシチュエーション。

……なのに。

「……ごめん、シリティア。」

珍しく小さな声で、申し訳なさそうな笑顔を浮かべた。

その表情は切なそうで苦しそうで……

見ているこっちも胸が締め付けられる感覚がした。

「今の僕は……君に会っちゃいけないんだ。」

ヨイチの言葉に、誰が疑問を抱いた。

会ってはいけない理由なんて、どこにあるのかさっぱり分からなかったからだ。

なんでそう思っているの？

「なんでだ？理由を言ってみろ。」

理由次第で引きずってでも連れて行くか行かないか決めてやる。」
夕花は鋭い声で、そう問いかけた。

「シリティアを守れないなら、僕はシリティアの側にいる資格がないから。」

ヨイチの言葉に、私の中で何かがプツンと切れる。

「……なにそれ。」

私はそうつぶやいた。

自分でも驚くぐらい、どこまでも冷たい声だった。

「シリティアを守れないとシリティアの側にいる資格がない？
笑わせないでよ。」

シリティアの気持ち分かって言ってるの？

あなたのその無駄なプライドがシリティアを傷つけてるの！

そんなの……守る以前の問題でしょ。」

私は大きく息を吸い込む。

「相手の気持ちを考えずに、守るなんて大口叩かないで！」そこまで言って、我にかえる。

さすがに言い過ぎたか、とヨイチを見た。

そこにはどこかスツキリしたようなヨイチがいた。

ヨイチはゆったりと口を開いて、一人の名前を呼ぶ。

「シリティア……。」

「な、なに？」

「側にいて……いいの？」

不安げに聞くヨイチを見て、シリティアはクスッと笑った。

「求婚しなかったらね。」

あんたは私の下僕なんだから。」

シリティアがそう言うと、ヨイチはパッと表情を明るくさせる。

「シリティア、君は最高だあああ！」

と言いながら、シリティアに抱きつこうとしていたから、

シリティアからの鉄拳＋夕花からの鉄拳をくらい、

その明るい表情はたちまち曇ったけど。

ほんとヨイチってビックリするぐらい単純だなあ……。

「クレハ。」

「あ、ヨイチ。」

私の肩を叩き、声をかけてきたのはヨイチだった。

「どうしたの？」

「……ありがとう。」

それだけ言うと、ヨイチは再びシリティアのところへ戻った。

やはりシリティアに罵倒されている。

それでも嬉しそうなヨイチに呆れた。

「やっぱりヨイチはああでないとね。」

「そうだな。」

私と夕花は呆れながら笑った。

戻ってきて（後書き）

gggdにも程がありますよね。
すいません。

プー太さん、よろしくです！

久しぶり（前書き）

今回はベストタイミングで回ってきて嬉しいです。
丁度テスト明けだったので。

余談はこのくらいにして、今回も書かせていただきます。
プー太です。

久しぶり

シューヤとヒロトの待つ村長の家——麗しのシリティアの自宅だ——に向かう道中、僕は斜め前を歩くシリティアの可憐な後ろ姿を見つめながら、心の中で彼女の名前を呟いた。

それが聞こえたのかどうかは定かではないが、彼女は赤毛を揺らしてこちらに振り向いた。

「さっきからジロジロ見すぎなのよ。シャキシヤキ歩きなさい、ヨイチのくせに」

「え……それって君の隣を歩いてもいいって誘ってくれてるの？」

「ち、違う！断じてそんなことはないわ！」

頬をピンク色に染めて顔を首が千切れんばかりに振る彼女。

即座に顔を前に向けられてしまったのは残念だったが——可愛いかったなあ。

約4日振りに会ったシリティアはとても新鮮で、浮足立つ心を抑えるので精一杯だ。

今にも垂れてきそうな鼻血を吸い上げて、歩く速度を上げた。

歩くことで振動して痛みが走る片腕を不自然に見えないように動かしながら。

「帰ったぞ……っていない。紘斗、秋弥、どこだ」

あれから10分ほど歩くと目的地に到着した。

だが、そこに男二人の姿は無かった。

ユーカの反応からして何かが可笑しい。

まるで二人が忽然姿を消してしまったと言いたげな焦った表情を浮かべていた。

床には陶器が割れて破片が散乱していて、何者かが争った形跡もある。

「誰がこんなことを」

まさか、これはシリティアのストーカーが家に押し入って暴れまわったのか？

「ヨイチ、考えてること全部口から出てるよ。それにこれは秋弥がやったと思うの。強盗じゃないよ」

「なんて奴だ。シリティアの私物かもしれない陶器を割るなんて！」

「お皿なんてまだ何枚もあるから気にしないわ、別に。けど……この足跡が気になるわね」

いつになく落ち着き払った声で言って床を指差す彼女の美しい指の先を見ると、この家の住民にしては小さすぎるサイズの足跡が絨毯に付いていた。

しかも、一つではない。ざっと目で確認して最低でも3人はいる。

「――これは大きさからして子供だね。流石シリティア！君は天才だ、こんな処にまで気がつくなんて……どうか僕のお嫁さんになつてくれないか」

「「場を弁えろ（て）」」

左からユーカ、右からはクレハのビンタが飛び交う。（ユーカは正しくは拳だった）

鉄槌を食らってジンジンと痛む両頬を擦りながら推理を続けた。

「村の人が履く靴の裏の模様とよく似ているから、ここに来たのは村の子どもたちで間違いないことは確かだよ」

「そんなのはどうでもいい。あいつ等には留守番を頼んだんだ。――広場で遊んでいてみる……絞めてやる」

踵を返して家を出て行ったユーカを追うようにクレハとシリティアも駆けて行く。

一人出遅れた僕は床に散乱した陶器を見た。

――シリティアが使った（かもしれない）陶器は貴重だ。頂戴すべきか否か。

少しの間悩んで、

「今日はいいか……」

僕も3人の後を追った。

久しぶり（後書き）

なんか微妙。

果てしなく微妙。

すいません、緋紹さん。

続き…いや、次もおねがいます。

縮まった距離（前書き）

緋紹です。久しぶりすぎて困ってます。

皆様、長らくお待たせしました、申し訳ありませんでした m（

し m

縮まった距離

「どこで見たんだよ：」

秋弥がその辺に転がっている農具らしきものを横にやりながら呟いた。

「ここだって！！俺達確かに見たもん！！」

子供が必死に伝えてくる。うん、そうかもしれないね。でもさ。

「昼間っからこんなところ来ても、幽霊出てこないと思うぞ？」

あれから俺達は子供達に連れられて村の農具倉庫らしきところに来ていた。俺は子供達に聞いた話を反芻する。

昨日、子供達は遊び道具になるものを探しにこの倉庫に入り、かなり奥の方まで探しに入ったらしい。

この時代、というか、この世界で進んでいる文明ではまだ電気系のゲームは開発されておらず、最近やっと電気が開発されそれを扱えるのは未だにお城にお住まいの方々と裕福な貴族だけらしい。

とにかく子供達は暇を潰すため遊び道具を探しにこの中へ入った。

段々中に進むにつれて薄暗くなっていき、怖くなった子供達は引き返そうとして、ふと傍にあった窓が陰ったことに気付き、そちらを恐る恐る振り返って——真っ白な幽霊が窓からの光を遮っていたのを見たのだった。そこからはもうパニック。全員悲鳴を上げて飛び出し、各々家へ直帰。そして今朝集まり、やっぱり気になるよね、うん気になるよねで、我が万屋へgo。

そして今に至る。

「だって昨日もこのくらいの時間だったもん！！」

「え？そうなの？」

もしかしてこっちの世界とこの世界では幽霊の出る時間帯違うのか？いや、でも薄暗くなつて怖がったってことはやっぱり夜に出るとか言われてんじゃないかな。

「まあ、今日は帰ろう。どうも出なそうだから」

「…はーい」

秋弥と子供達を連れて外に出た。

現在日本で言う15時0分。

子供達は遊びに別の場所へ行った。

「シリティア達、どうなったかな」

秋弥が隣で呟く。うん。俺もずっと気になって仕方なかったんだ。

俺はヨイチの腕を思い出す。赤く、腫れた腕。多分、まだ治っていない。

ヨイチはきつと誰にも腕のことを話さないだろう。すべてはシリティアに罪悪感を抱かせないために。

「…とにかく、家へ戻ろう。子供達の依頼もあるし、ヨイチのことも心配だけど、俺達はしなきゃならないことをしよう」

「そうだよな。うん、そうだよな!!」

秋弥がすっきりした顔で笑う。

「よし紘斗!! 帰るぞ——」

そう言った秋弥が固まる。ちなみに俺も絶対零度の寒さに固まる。

う、おおう。何やらかなりお怒りのご様子だ。なんで？ 俺達何かしただろうか。

「お、お帰り…夕花…」

「ただいま。さて聞こうか。何してるんだお前ら」

「いや、あの、帰ろうと」

「質問を間違えた。何してたんだ？」

うわぁ、超怒ってる。そうですよね!! こんな時にもし遊びに行ってたんなら八つ裂きにしますよね!!

「お、落ち着け夕花。断じて違う。違うからな!!」

秋弥が恐る恐る振り返りながらダラダラ汗を流す。

「そう、違う!! 子供達の依頼を——」

そう言いながら振り返って、目の前にいる絶対零度の怒りを称えた夕花の後ろに怯えきった顔をした紅葉、シリティア——そしてヨ

イチがいることに気付いた。

「依頼？」

少しだけ怒りを緩めた夕花に事のあらましを説明する。

「ふうん。時期はずれな上に時間帯も外れて現れる幽霊か」

今はこちらの世界は冬だ。確かに時期はずれな幽霊だな。

「ああ。…どう思う？」

「そうだな…」

「多分、子供達は嘘ついてないと思うよ？」

紅葉が首を傾げて言った。

「なんで？」

「さっき、数人子供達が走って行ったんだけど、多分このことを話してたんだと思う。かなり怖がってたから。今の話聞いてやっと理解した」

「そっか…」

夕花とヨイチと俺を除いた3人が話し込みだして、俺はそっとヨイチの隣へ移動した。

「もう、平気か？」

そう尋ねると少し目を見開いて、照れたのかムスツとした顔をした。

「ああ。…ありがとう」

「え？何が？」

ちよっと驚いた。まさか、お礼を言われるとは。

「ああ、骨折の応急措置？」

「それもだけど…。シリティアに腕のこと、言わないでいてくれたことだ」

「あ、やっぱり言わなくて正解だったか。お前なら、嫌がるかと思っただ」

ヨイチと顔を合わせないまま会話を続ける。

「……妙に当たってて腹が立つな」

拗ねたような声に今までの棘が消えていることに気付いた。

うわ、思ってたより嬉しい。やっぱりああいう風に言われるの、思

つてたよりつらかったのかな。

「ハハッ。腕は、大丈夫なのか？随分、腫れてたけど」

「綺麗に折れてたらしくてな。あと2ヶ月あれば完治するって言われた」

「そうか」

ホッと息を吐く。

「ヒロト」

ふとヨイチが俺を見た。

「今まで、わ、悪かったよ」

思わず吹き出す。突き上げるような軽快な笑みが喉をつく。

「な、何だよ！！」

「す、すげえ言いたくなさそう…っ、ハハッ最高。ほんと最高」

シリティア相手じゃなければこいつもツンデレなのか。変な特性だな、おい。

「何してるのよ2人共」

「シリティア！！」

ヨイチの雰囲気明るくなる。シリティアが後ずさって俺の後ろに隠れた。

そうそうこれこれ。こうじゃなきゃヨイチじゃない。

動かさないようにしている腕を見て、無理をさせないようにしようと決めた。

翌日、俺達は再び倉庫に来て中を調べていた。

夕花は幽霊を信じていない。科学的に証明できるはずだと言って、なら調べてみるかと今に至る。

「——え？」

「だからね、ヒロト達、一度も元の世界に帰りたいたって言わないでしょ？どうしてかしらってずっと思ってたのよ。べっ、別に寂しくなってるんじゃないんだからねっ」

シリティアが慌てたようにそっぽを向く。

「ハイハイ」

「…もしかして、帰りたくないとか？」

シリティアが首を傾げて言った。

少し考えて首を横に振る。

「いや、そうじゃない。そりゃ、帰りたいよ」

「…そうなの？じゃあ、どうして？」

「うーん…なんて言うかさあ…」

奥の方を探している秋弥、夕花、紅葉に目をやると同じようにシリティアも3人に目を向けた。

「あいつらも、一度も帰りたいてって言わないだろ？」

「ええ」

シリティアが頷く。

「多分、あいつらもわかってるんだ。今は帰れないってこと」

「今は帰れない？」

「そう。正確には、まだ帰るべきじゃない。よくわかんないけどな、なんとなく皆感じ取ってるんだと思う。今帰ったら、大変なことが起きるって言うか…、世界的に見たら、大きくはないけど、俺達にとっては大きなことが起きる気がするんだ。うまく、言えないけどな」

「…大変なこと…」

シリティアが呟いた。そして俺を仰ぐ。

「とにかく、今は帰らないのね？」

「そういうことになりますね」

「そう」

そういうと嬉しそうに笑って夕花の方へ歩いて行った。

縮まった距離（後書き）

次は、夕さん！！

倉庫にて（前書き）

お待たせしました。

期限破りの常習犯、夕です。

倉庫にて

「本当にここで見たのか？」

「本当にほんとだって！」

「…ふーん？」

連れてこられた倉庫の前に立ってみる。

どう見たって、お化けが出るような雰囲気ではない。

そりゃ、他の建物に比べるとボロくて年期がはいってるって感じだが、この時間帯に見ても…全く怖くないと言うか。

「俺たちを疑うつもりかー？」

秋弥の服をくいと引っ張る子供がひとり。

「おー、ゼファロス！いたのかー」

秋弥が撫でるようにゼファロスに手をやると、ゼファロスはむっとしたようになった。

他の子供たちも同じようで、信じてもらえないことに文句を言っている。

「とにかく入ってみて！お化けがいるはずさ！」

ここはお化けの住みかなんだ！と持っていた棒を振り回す。

あやうくその棒がシリティアにあたりかけて、ヨイチがすごい剣幕で怒鳴っていた。

…誰も聞いてないのが、むなしいな。

言われたとおり、あたしたちは半信半疑のまま中に入ってみることにした。

「シリティア…怖かったら僕がいるからね」

「こ、怖くなんてないわよっ！」

ヨイチ…戻ってきたら戻ってきたで、うるさい。

でもシリティアはまんざらでもなさそうだ。

よく見ると、なかなかお似合いなのでは？

——しばらく進むと……と言ってもそんなに奥行きはないが……突き当たりになった。

鍬や鎌、ベントラスにつけるであろう農具などが積んである。ここになんの遊び道具を探しにきたのやら。

「今日もないじゃん」

紘斗がのんびりと言う。

するともちろん子供たちはむくれる。

「もうちょっと待ってみよ？出てくるかも」

それを見て紅葉がゼファロスに声をかけた。

気を使ったつもりなのだろうが、それが余計気に入らなかったらしく不服そうに唸りながら、彼は辺りを見て回る。

「……ちようどこんな感じの布だったよな」

なにかに被せてある布を恐々と引っ張る。

——と。

ゼファロスの動きが止まった。

？……どうしたのだろう。布を少し引っ張ったまま固まっている。

「ゼファロスー？」

「何かいたのー？」

ゼファロス以外は、いつまでたっても現れないお化けに飽きてきたのか、もうどうでもいいか、というように他の農具をあさっている。その仲間たちが声をかけても動かない。……と思ったら、ぎこちなく顔だけこちらを向いた。

「……！！」

口をパクパクして何か言っている。音になってないが。

「尋常じゃない感じだな」

「シューヤ、シューヤ！」

やっと音になった言葉で、顔をひきつらせながら秋弥の名前を叫ぶ。秋弥がへらへらしながら近づくとゼファロスはまだ掴んだままだっ

た布を秋弥に押し付けた。

「い、い、今これ持ったらな！下でな、な、な、なんか動いたんだ
！」

一瞬、その場の空気が固まった。

倉庫にて（後書き）

いきなりですが、こんな企画が出ました。

その名も『第1回！キャラクター人気投票でもしますか。』です！
今までの登場キャラクターの中でお気に入りを教えてください。メ
インからモブまで誰でもかまいません。
もちろん作者でも！

…すみません、ふざけました。

さあ、みなさん、どしどし投票しちゃってください！！

意外な正体（前書き）

いつも短い秋雨です

今回は長めのつもりです！

意外な正体

う、動いた……だと……!!?」

「み、見間違いないじゃあ……」

声が震えてるぞ、紅葉。

「絶対動いた!」

紘斗の後ろに隠れたゼファロスが必死に主張していた。

「まさかホントにお化け……!!?」

真剣な顔のヨイチ。

普通だったら笑うのに今はそれどころじゃない。

「だ、誰か捲ってこいよ」

紘斗の顔が心なしに青い。

「お、お前が行けよ」

「嫌だ! ヨイチが行けよ」

「僕はシリティアの言うことしか聞かない!」

「まだそれ言ってるの!?」

こいつ意外なところで頑固だな!

「シリティア、なんか言ってくれよ……ってシリティア!?」

ヨイチを動かすにはシリティアが一番。

ということでシリティアに声をかけたがなんと放心状態。

オーマイガット。

「シリティアああああ!!!!」

そんなシリティアに抱きつこうとしたヨイチは夕花の鉄拳を受けていた。

「ふう」

何時もより威力が高かった気が……。

「お、おい、大丈夫か?」

「……………」

余程効いたらしいな……。

ちょっと同情する……わけないか。自業自得だし。

「全く、情けないな。男なら格好良く逝ってこい」

え、漢字違っ……!!

「な、秋弥？」

まさかの指名かよ!

オレ死ぬし!!

「紅葉……」

紅葉に助けてと訴えてみた。

「えっと、頑張って」

……ああ、通じなかった。

こうなったら紘斗に……!と考えるとそちらに向くと我関せずでゼフ

アロスを宥めていた。

くっ、腹を括るしかないのか!

「……よし」

慎重に一步一步進んでいく。

ゆっくり、ゆっくり……。

白い物体まであと一歩というところでそれは動いた。

思わず足を止める。

白い物体はごそごと動いた後、ピタッと止まった。

その場にいた全員が息をのむ。

そして——白い物体がいきなり大きくなった。

「~~~~っ!!」

それと同時に皆倉庫から飛び出した。

オレ? もちろん置いてかれたよ。

足が動かなくて逃げなかったんだ!

どうしようかと悩んでいたら白い物体から白いのが無くなった。

正確には白いシートが落ちた。

「ん? シューヤじゃないか。こんなところで何をしてるんだ?」

今度こそ逃げようとしたオレにかかった声。

って、この声は……。

「……………カウジェ？」

「ああ」

てことは、今回のお化け騒動の原因はカウジェ？

「……………なんだよそれー」

「は？」

なんでもカウジェはこの倉庫で探し物をしてたらしい。
そしたらなんか騒がしくなって見てみたらオレがいた、と。

「とりあえず、依頼完了っつと」

「なんの話だ？」

「気にすんな」

カウジェには後でちゃんと説明してもらおうとしよう。
これにて一件落着ーってな。

この後カウジェはあの倉庫でしてたことを皆に話してお化けがカウジェだと知った子供達は泣きながら怒って、紘斗達は軽く呆れていた。

子供達の反応にどうしたらいいのかわからず（原因が自分だから）慌てていたカウジェは当分忘れないと思う。

意外な正体（後書き）

依頼完了！

次は紅さんよろしくー

七不思議、調査しますか。(前書き)

遅れまくってすいません！
駄文乙な紅です。

七不思議、調査しますか。

『七不思議？』

私達は声を揃えて、目の前にいる少年にそう言った。

「うん！その中でもさ、なんか奇妙なのがあるんだ！」

「へえ、こういった感じのなんだ？」

夕花は少し興味を持った表情で、少年——ゼファロスに問いかけた。

「新月の夜に洞窟の中から、うめき声が聞こえるって。でも最近はないんだか……すっげえキレイな歌声も聞こえるんだってさ！」

興奮ぎみに七不思議の内容を話すゼファロス。

このパターンはもしかして……。

「で、俺らにどうしろと？」

「調査とかはちょっと……。」

紘斗と秋弥は冷や汗をかきながら、依頼をやんわりと断ろうとしているのだろう。

姿勢が引きぎみだ。

「なんでだよー！せっかく調査してもらおうと思ったのに……。」

「まったく、お前ら何を言ってるんだ？ここで断ったら恩返しできないだろ。」

そのためにはゼファロスの依頼引き受けないとな。」

「でもさ夕花あ……」「黙れ。ゼファロス、この依頼引き受けた。」

「わー！ありがとなっ！」

夕花は紘斗の言葉を遮り、依頼を引き受ける。

そしてゼファロスは純真無垢な満面の笑顔を見せた。

またホラー絡みな依頼なんて、正直嫌だなあ……。

「シリティアー……。」

私は顔を真っ青にしているシリティアに声を掛けた。

「私だって嫌よ！でも怖いわけじゃっ！」

「……怖いんだね。」

私はそんなシリティアをかわいいと思いつつ、少し呆れ、笑った。

「ああ、シリティア！怖がつてる君も最高にかわいブベラッ！」

「ちよつとは空気読んでね、ヨイチくん？」

私は、固く握った拳をヨイチのお腹にパンチを入れた。

そんな私を見て、紘斗は一言。

「最近紅葉もあなどれなくなってきたな。誰の影響なんだかブホッ！」

「……何か言ったか？」

黒い笑みが怖いです、夕花さん。

「イエ、ナンデモアリマセン……。」

「いまさっきからみんなケンカしてんのか？」

それよりさ！今日は新月だから調査に行こうぜ！」

ゼファロスは目をキラキラさせながらそう言った。

「分かった。でもお前はついてきたらダメだぞ。」

「ええー！なんでだよー！」

「危ないからに決まってるだろ。大丈夫、男共がちゃんと調査してくるからな。」

『なんで俺たち？』

今夜かあ……。

怖い思いをするのは嫌だなあ……。

てかぶっちゃけ行きたくない……。

そんなことを考えていた。

まさかあんなことが起こるなんて、全然想像もできなかった。

七不思議、調査しますか。（後書き）

果たしてゼファロスはこんなキャラだったのだろうか。
とりあえずすいませんでした。

gd gd 承知です。

プー太さん、よろしくです！

調査隊出動（前書き）

プー太です。

夏になってきました。

アイスが恋しい時期ですね。

調査隊出動

日が沈み辺りが寝静まって暗闇に包まれている中で、僕はひとり空にどっかりと居座る月を眺めていた。

流れる雲に姿を隠しては、またすぐに姿を現す月。心なしか赤みを帯びて見える。

それはこれから不吉なことが起こる前兆のように思えた。

――あと少しで集合時間がくる。

不安が隠せず無意識に腕を触っていた。

はっとして腕から手を離す。

なんだかな……。

「ヨ―イーチ―」

「うわっ」

名前を呼ばれたあと突然押し倒されて後頭部を地面に打ち付けた。

「ヨイチ、ヨイチ、ヨイチ―！七不思議こえーよ。洞窟なんかいきたくねー！」

「お前はシューヤか。僕は君を受け止めるためにいるんじゃない。

僕の胸はシリティアのものだ！」

引っぺがして立ち上がると、頭をさすった。

髪の毛に砂が絡み付いていて変な感じがする。

「七不思議いいいい！」

「うるさい」

「へぶっ」

半泣きで喚くシューヤをチョップで黙らせたのは女子二人だ。

「まだ喚くかお前は。いい加減腹をくくれ。うっとうしい」

「そうだよ。大きい声出して今何時だと思ってるの」

「どうどう。ヨイチ悪いな、大丈夫か？」

「ああ」

助けに入ったヒロトに抱きついて「お化けいやだ。俺帰る」と呪文

のように繰り返すヒロトはこの際無視してもいいだろう。

「女神のように美しいシリティアの姿が見えないけど、なにかあったのか？」

「ここにいるわよ！」

クレハの背後から現われたシリティアはいつ見ても綺麗だ。たとえば顔面蒼白であっても。

……顔面蒼白だって！？

「僕がついてるからね？もう大丈夫だよ。ほら、手を繋いでもいいから」

「け、結構よ」

「はあ……。ここにいつまでいても埒が明かない。さっさと洞窟まで行って、ちゃっちゃと解決して帰るぞ。案内しろ」

ユーカに首根っこを持って引き離されると先頭に放り出された。ため息を吐いて気を入れ替える。

「ここまでは月明かりで足元が把握できてただろうけど、ここから先は危険だから念のために明かりを燈してくれ」

「わかった」

ユーカは頷くと手の平より小さく、平べたい容器を取り出した。親指で銀色の歯車のようなものを擦るとシュボツと音がして火が噴き出した。

見るからにこの世界の物ではない。

物珍しそうにソレを眺める僕に気付いたのか、ヒロトが説明をしてくれた。

「ライターって言って、俺たちの世界にあるものなんだ。かなり便利でさ、俺が持って行こうって提案したんだ」

「変なものがあるんだな……」

関心してライターに手を伸ばすと、ガシリと腕を掴まれた。

「ヨイチ」

「な、なんだ」

「火を移せるものが欲しい。長時間こうしているのは熱い」

無駄に迫力のある声で言われ、急いで予備用に準備していた松明を渡した。

「さあ、行くぞ」

目にも止まらぬ速さで松明に火を移すと明かりが広がった。血走る眼をしたユーカ。君が先頭を行けばいいじゃないかと思うのはきつと僕だけではないはずだ。

しばらく歩くと僅かだが歌声が聴こえるようになってきた。叫ぼうとするシューヤの口を塞いで足音を忍ばせ、慎重に洞窟へ近づく。

みんなの顔は緊張と恐怖で強張っていた。

「僕が様子を見てくる。10分以上帰って来なかったら絶対に入らずに引き返して村の人に知らせてくれ」

「ヨイチなに言ってるんだ。そんな不吉なこと言うなよ」

「もし、の話だから。そんなのあり得ないだろうけど一応ね。じゃあ行ってくる。シリティアを頼んだからね」

制止の声を無視して僕一人で洞窟の中へと足を踏み込んだ。

中は外に比べて空気が冷たい。

歌声は奥の方から聴こえるみたいだ。

慎重に進んではいるが、明かりがないせいで足元がおぼつかずに石を蹴飛ばしてしまった。

カッーン……。

音が反響して、波のように押し寄せる。

息を呑み込んで冷や汗を拭う。

ほっと胸を撫で下ろして気付いた。

——歌が聴こえない。

ヤバイと直感し、引き返そうと後ろに振り向くと同時に腹に衝撃が走った。

「うっ」

何かで口を覆われ、意識が遠のいていく。
意識が途切れる間際に聴こえたのは野太い男の笑い声だった。

調査隊出動（後書き）

緊張感のある話って難しいんですね（．．）

さて、アイスでも食べながら反省会でもしてみましようか。

次は緋紹さん、よろしく

暗闇の中で（前書き）

回ってきました！

お気に入り登録ありがとうございます！

暗闇の中で

——あれから、10分以上経った。未練がましく待っていたから、もしかしたら20分くらい経っているかもしれない。

「…ヨイチ：遅いな…」

洞窟の前にしゃがみこんで溜め息をつく。吐く息が白くなって消えた。

「あいつ、迷ってるんじゃないか？多分そうだって！！だってあいつもこの洞窟に入ったことないんだろ？」

顔をひきつらせ若干涙目になった秋弥が誰に聞くともなく言った。

「あいつが迷うはずがないわ」

シリティアが表情を硬くして、少し怒ったような声で返した。

「私もそう思うよ」

紅葉が頷く。

「なんで？」

秋弥が首を傾げる。

うん、俺もヨイチが迷うはずがないと思う。だって、シリティア大好きなあいつがシリティアを置いて迷ったりするわけない。

……まあ、ふざけたように思えるかもしれないけど。あいつならそれが成り立つから怖い。

「あたしもそう考えてた。考えてもみろ、あいつはシリティア好きだが頭は悪くない。分かれ道がきたらどちらに進むか統一するはずだ。行きは分かれ道に当たったら右に進む、って感じでな。それなら帰りは全て左に行けばいい」

夕花が洞窟の入り口にもたれながら闇を睨みつけて言った。

俺はその言葉に頷く。

「何にせよ、ヨイチを迎えにいかないとな」

全員を見渡す。硬い表情のまま全員が頷く。

よし。じゃあ、決行だ。

短くなった松明の火を踏んで消した。

「近くに酒蔵あったよな？」

「え？ ええ」

シリティアが怪訝な顔をする。

「よし、悪いけどシリティア、そこまで案内してもらえる？」

「いいけど：何するの？」

「新しい松明作る」

「紘斗、あたし達は何をすればいい？」

夕花が眼鏡を直しながら聞いてきた。

「夕花と紅葉は2人でカウジェさん呼んできてくれ。その後シリティアと洞窟前で合流」

「わかった」

紅葉が頷いた。

「紘斗、オレは？」

秋弥がビクビクしながら聞いてきた。

「お前は俺と一緒に来るんだよ」

そう言って引きずるように歩き出す。

酒蔵についた俺は一番アルコール度数の強そうな酒をもらって途中で拾った木の枝にぶっかけた。下の方に裂いた布を巻いて持ち手を作る。

酒蔵を出てからライターで火をつけた。

勢いよく燃え出す。

洞窟前まで帰るとすでに夕花達は集まっていた。

カウジェさんの前に立った。

「俺と秋弥で中を見えます」

「そんなことさせられるわけないだろう」

カウジェさんが顔を歪めて言った。

「子供に行かせるわけにはいかない」

「平気です。何かあるとは限りませんし、俺達はいざとなれば髪色

で撃退できますから」

「お前は…そんな風に自分の個性を使うな」

「とにかく行きます。依頼されましたし、心配ですから」

「……………どうしても行くのか」

「はい。カウジェさんには、夕花達と一緒に反対側に回ってほしいんです。もしかしたら抜け穴とかあるかもしれないですから」
カウジェさんはしばらく考え込むとしぶしぶ頷いた。

「絃斗、秋弥」

夕花が俺達を呼ぶ。

振り返るとニツコリ笑われた。

「迷うなよ」

「「……はい」」

なかなかの黒い笑みに思わずガクガクと頷いた。

洞窟の前に立って松明を掲げる。

「よし、行こう」

暗闇に飛び込んだ。

水の跳ねる音が響く。

中を照らすと両側の壁や天井に太い木の棒が入り組んでいた。
棒というより柱だ。

「くーらーいー」

秋弥が俺の後ろでビクビクしながら歩いている。

珍しいな、秋弥がこんなになるなんて。

「秋弥ってそんな怖がりだったっけ？」

「忘れたか！！オレはホラーが大嫌いなんだ！！」

秋弥が噛みつくように返してきた。

「そうだったっけ…」

話しながら歩いていると足が何かを踏んだ。

「え？」

「何！？」

屈んで足元を照らす。

……これ…。

「ヨイチが持っていた松明じゃないか？」
だって持ち手が俺の巻いた布だ。

「……松明を落としたのか…」

でもそれならなんで場所を動いたんだろう。ヨイチなら俺達が入って考えることを考えて、そんなに動こうとは思わんだよね。

頭を掻いて秋弥を見ると秋弥も神秘的な顔をしていた。

周りを見渡すと何かが光った。

屈んでそれを見て——首を傾げた。

「紘斗？どうした？」

「見ろよ、これ」

「あれ、これって…」

「だよな」

「ああ」

どこかで見たことのあるピラス——。

「どこで見たんだっけ？」

「えーっと…」

ふと記憶からピラスを見た背景が浮かんできた。

燃えるように赤い髪。その傍に寄せられた顔。その耳に下がっているピラス。赤い、夕暮れ。

「あ——！！あとちよつとなのに出てこない！！」

頭をかきむしって目線を下に下げる。

とにかく、動かないと始まらない。

目の前の道を見て悩む。

2 本道。

中に入って初めての分かれ道だ。

果たしてヨイチはどっちに行ったんだろう？

「別々に行けばよくね？」

秋弥がノホホンと言った。俺は首を横に振る。

「本で読んだことある。こういう時は別れない方がいいんだってさ」
「ふーん…」

ふと目線をさまよわせた秋弥が固まる。少しだけ血の気が引いたように見える。

「秋弥？」

「ひ、紘斗…これ…」

「なんだよ」

秋弥が指指した方を見て——俺も固まった。

「血が…」

足元に僅かに血がついていた。少し固まりかけている。

どういうことだ？なんで血が？

まだ固まってないってことはこれはついさっきついたってことで…。

ふと、先程自分の考えたことを思い出した。

『ヨイチなら』。

じゃあ、もし、ヨイチが動いたのは自ら望んだものじゃないとしたら？

自主的に『動いた』のではなく、『動かされた』のだとしたら？

息が早くなる。

「ヨイチ…!!」

暗闇の中で（後書き）

感想いただけたら嬉しいですm（　　）m
作者共の励みになりますのでよろしくお願いします！

洞窟外で。(前書き)

おお…短い。

手書きのほうに向いている。
つくづく思った夕です。

洞窟外で。

ヨイチが入って行って20分、紘斗と秋弥が入って今10分くらいか。

月はすでに真上にさしかかっている。

「ユーカ、どうだ。何か見つかったか」

「何も」

「そうか。クレハはどうだ？」

「それっぽいものは無いです」

枯れた草をかき分ける。

ふたりが洞窟に姿を消して10分。あたし達——あたしと紅葉、シリティア、そして村長の4人は、洞窟に抜け道がないか探すべく歩いていた。

しかし探せど探せどそんなものは無い。

「ヨイチ…どうしたのかな…」

紅葉が草から顔を庇いながら言った。

「紘斗と秋弥も…」

「確かに遅いわ」

シリティアも草むらの向こうから姿を見せる。

その上に輝く月がほんのり紅く、不吉な光を放っていた。

それから更に10分ほど立っただろうか。少し肌寒くなってきた。

「これだけ探してないとなると、一方通行なのかもしれないな」

「どうしよう。入り口に戻ったほうがいいのか」

「私はクレハに賛成ね。このままヨイチ達が出てこないようなら、村に戻って大人を呼んできたほうがいいと思うの」

そうシリティアが言って、村長も頷いた。

あたしを除く3人は、入り口に戻る、という話にまとまっているらしい。

それでもあたしは草を掴んだ。

「ユーカ？行くわよ？」

「あたしは残る。あいつらならほっとけばいい」

「え？」

シリティアは訳がわからないといったように眉を寄せた。

紅葉もなにか言おうとして口を閉じた。

「ちよっと！なんでそんなこと言うのよ！ほっとけばいいだなんて！！」

「ヨイチが心配か？」

そう言うと、顔を真っ赤にして言い返してきた。

「そう言う意味じゃないの！ユーカはヒロトとシューヤが心配じゃないの！？」

今度はこっちが眉を寄せる番だった。

心配じゃない？

心配に決まってるじゃないか。

「あんなに仲がいいのに！！」

：ああ。そういうふうにとらえたか。

ひとりで一方的に怒っているシリティアと、おろおろしている紅葉。村長は腰に手をあてて溜め息をついた。

仲がいい、か。

「あたし達が仲がいい：。」

ふと思ひ出す、数年前の出来事。

——そういえばあの時から、ふたりはずっとあたしの隣にいてくれたな。

「：はは、仲がいいというより悪友だな、あのふたりは」

「どういう意味よ」

「まあ、いいじゃないか。それより今のは、“あいつらなら何とかしてくれる”の意味で“見捨てた”わけじゃない。勘違いしてくれ

るな」

苦笑しながら手を動かす。

あたしはあいつらに感謝しているんだ。そしてあいつらを信じている。

頼りにならないことも多いけどな。

見ると、シリティアと紅葉は顔を見合せて首を傾げていた。

——と、草に埋もれた何かが見えた。

黒い…塊…?…違う、あそこだけ洞窟の壁がへこんでいるようだ。

もしかしたら入り口かもしれない。

期待を込めて草をかく速度をあげた。

洞窟外で。（後書き）

ちらっと夕花さんが気になること言ってるけれど。
いつか番外編が書きたいな。

次は秋雨さん。

話が洞窟内に戻ります。

砂埃やばい！（前書き）

お待たせしました、秋雨です

砂埃やばい！

紘斗が持っている灯りを頼りに奥へと進んでいく。

「ヨ、ヨイチー」

「そんなんじゃ聞こえないだろ。もっと大きな声でー、さんはい」

「ヨイチーい」

「……………はあ」

さっきからこれの繰り返し。

わざとじゃねーし。

「歩きづらい。そろそろ離せ」

「無理無理無理！」

「……………はあ」

ため息つかれたって無理！

恐る恐る歩いていると、首筋に冷たいものが落ちてきた。

「っ、ぎゃあああああ！……！」

「うわあああああ！！！」

オレが叫ぶと紘斗が驚いて叫んでいた。

これぞ叫びのハーモニー。

「いきなり叫ぶなよ！」

「だっ、首っ、ぞわって！」

「はあ？」

必死に言ったのに伝わらなくて、落ち着けよとなだめられた。

「それで？」

「首に冷たいものがかかってぞわーで叫んだ」

ん？自分で言っというて何だが、これで通じるのか？

「あー、はいはい」

お、おおう……………。

通じてる……………。

「それ多分水滴だ」

ほら、と天井が見えるように松明を掲げる絃斗。

確かに今にも落ちてきそうな水滴がたくさんあった。

「マジか……」

水滴でビビるオレって……！

「ほら、早く行くぞ」

「うい」

若干落ち込みながら再び奥へと進んでいく。

少し進んだところで、分かれ道にぶつかった。

「……どっちだ？」

「右」

「秋弥、根拠はあるのか？」

「ない」

「おいおい」

人生勘で動くことも大切さ。

「さあ行くぞ！」

気合いをいれて足を踏み出す。

すると景色が変わった。

いや、コケただけッス。

「秋弥！？ 大丈夫か！？」

「…………いてえ」

地面にぶつけた頭を押さえながらゆっくり立ち上がる。

うお、頭がぐらぐらする………。

バランスをとろうと壁に手をつく。すると、

「お？」

手をついたところの壁が倒れた。

ズズー……ン………

「っ、秋弥！？」

後ろから絃斗の声が聞こえるけど、砂埃みたいなのが邪魔でよく見えねえ……。

「絃斗ー、こっちー。げほっげほっ」

ぐあー、喉がーっ！

目がーっ！！

しばらくすると砂埃も収まってきて、目も復活した。

「なんかこの先って基地ありそうだな」

倒した壁の先に続く階段を眺めながらポツリと呟く。

「せめてここを誰かが通ったっていう証拠がほしいよな」
だよな！。

「ま、悩んだって無駄だ！行動あるのみ！」

「ちょ、秋弥こういうの苦手なんじゃないのか！？」

「いや、冒険みたいで面白いじゃん！」

笑いながら言うため息をつかれた。

なぜだ！

砂埃やばい！（後書き）

次は紅さん！

頑張っ
て！

その頃、外では（前書き）

放置しまくりごめんなさい。

お久しぶりです。

紅です。

その頃、外では

ズーン……

「ん？」

「どうした紅葉？」

夕花にそう聞かれ、私は洞窟のほうを見ながら答えた。

「今、変な音がしなかった？」

何かが倒れたような……」

「そんな音したか？」

と夕花。

「私も聞こえなかったわよ？」

とシリティア。

夕花達は聞こえなかったんだ。

「だったら気のせいかな……。」「

でも確かに聞こえた……。気になる。

もしかしたら2人が危険な目に遭ったのかもしれない。

ウズウズしていると、夕花はピシッと私に言い放つ。

「言っておくけど、ここで待機だからな。」「

「でも……。私、2人のことが……。」「

夕花は心配じゃないの？

という言葉を飲み込んだ。

なぜなら夕花が私をじっと見つめていたから。「心配だけど、あい

っらは大丈夫だよ。

紅葉にとっては短い間かもしれないけど、

今まであいつらを見てきただろ？

いつも通り、ヘラヘラしながら帰ってくるさ。」「

もちろんヨイチもな？

そう言って夕花は微笑んだ。

「……。そうだね。」「

私はそう眩き、

「ヨイチといっしょに帰ってくるよね！」

2人を見てそう言った。

「うん。だから2人を信じて待ちましょう？」

シリティアはそう言っただ窟を真っ直ぐ見つめる。

そうだ、私達は信じるのが役目だ。

私と夕花、そしてシリティアは願う。

――早く戻ってきて。

――早く早く、早く……

その頃、外では（後書き）

なんかすいません。

プー太さん、よろしくお願いします！

ここはどこだ（前書き）

プー太です。

自分が（自主作成も含めて）小説を書くのが久しぶりなので少し緊張します。

はいはどいだ

ピチョン——と小さな音を立てて水滴が一粒頬に落ちてきたことにより、僕の意識はゆっくりと浮上してきた。

背後からゲラゲラと野太い笑い声が聞こえる。声質からしてもシューヤたちのものではない。

うつすらと重たい瞼を持ち上げると、視界は火が灯してあるようである。

肌寒さを感じる空気に、少し湿った凹凸の激しい地面。体は紐のよな物で拘束されている。

——ここはどこだ。なぜ僕はこんな所にいるんだ。思考を巡らせて記憶を想起する。

……そうだ、ここは洞窟の中だ。気絶する前に誰かに腹を殴られて……そのままここに移動させられたのか。

結論を導き出したところでふとシューヤたちのことが頭に浮かんだ。どれくらい気絶していたのかは分からないが、きっともう彼らはここに突入している頃に違いない。

「コイツにまた会えるなんざ思ってもなかったぜ。一発食らわしてやりたくてウズウズしてたんだ」

「お前もガキだな。まだそんなこと思ってたのかよ」

どうやら僕を拉致した犯人は複数いるようで、歌声や話し声が聞こえる。

歌声は男のわりに綺麗で、洞窟の外で耳にしたものと酷似していた。七不思議の謎は解明したが——会話の内容がどうもひっかかる。

「思うに決まってるさ。あの時の嬢ちゃんの別嬪ぶりは想像以上だったんだからな。確か名前はシリティヤだったような……」

「名前まで覚えてるなんかそうとうだな、ガハハッ」

この起伏の激しい声はいつか聞いたことがある気がする。

シリティヤの名前の登場によってそれはすぐに確信へと変わる。

僕がシリティアのボディーガードをしていた時に撃退した山賊の大男だ。だとすれば話がつながる。

——頼む、どうかシリティアだけは来ないでくれ。目をつむって切に願った。

「けどよ、あの時俺も怪我したわけじゃないのにこれはやりすぎだったな。殴って気絶するのって当たり所が悪かったからなのか？随分経つが目を覚まさないぜコイツ」

「心配性な性格直せて。ほっときゃ勝手に起きるだろ」
何気に良い奴だと発覚！

脱力して無意識に脚を動かしてしまった。運悪く石を蹴ってしまい、音が鳴る。

冷や汗を垂らしながらも息を殺してじっとしていると、どうやら気付かれなかったようで息をのむ。

いつまでもこうしているわけにもいかない。逃げる策を考えないと。悶々していると、どこからか地響きのような低い音が洞窟中に木霊した。

「おい、誰か来たぞ！」

意外に良い奴だった大男の声で一斉に足音が遠ざかっていく。全員が行ったようで、この隙に紐から逃れようと身をよじる。腕に走る激痛奥歯を噛み締めて耐え、なんとか健側の腕を抜き、立ち上がってゆるんだ紐を落として走る。

どうか無事でいてくれと願った途端、足が泥濘に嵌り、顔から地面にダイブした。

「くそっ」

悔しさと情けなさに襲われる。だが、こんな所で立ち止まっている場合ではない。

泥を振り払って再び走り始めた。

ここはどこだ（後書き）

gd gd 万歳！とでもいいましょうか↑
緋紹さん、次お願いします。
すいません。

万事休す!! (前書き)

お久しぶりです! 緋紹です!

万事休す!!

壁に手をつきながら慎重に階段を降りる。

後ろを歩いている秋弥もゆっくり歩いてきた。

今さっきの音、結構でかかったよな、と頭をフル回転させながら考える。

多分まだ、ヨイチは中にいるはずだ。そしてヨイチを連れて行った奴も。

：てことは、聞こえてる可能性があるわけで。その上地響きしたわけ。

言葉少なく進む。

絶対誰か見にくると思うんですけど!!

ヨイチ運べたってことは2人はいるわけだろ。

そいつらの内どっちか、絶対来るだろ!!

その時の対処法とかいろいろ考えながら進んでいると何か音が聞こえた。

ハッとして立ち止まる。

「うわっ、もーなんだよー絃斗ー」

背中にぶつかってきた秋弥が鼻を押さえながら大きな声で文句を言ってきた。

「しーっ!! 静かに!!」

口に指を当てて小声で制する。

「なんだよ」

「今、なんか音したろ？」

「えっ、嘘っ」

秋弥が俺の背中にしがみついて前に広がる階段を見た。

「……………せ……………だせ!!……………」

「声聞こえたー!!」

秋弥が聞こえてきた声に後ろで小さく叫ぶ。

俺は階段に積もっている土を松明にぶっかけて火を消した。

火がついてたら見つけてくださいって言うてるようなもんだ。

左右の壁の凹凸に身を隠すように縮みこまる。

でも凹凸が浅い！！こんなじゃ隠れられないって！！

数人分の足音が近づいてくる。野太い男の怒鳴り声もオマケに付いて来た。

「捜せ！！誰かここに入ってきてるぞ！！」

「見つけしだい捕まえろ！！」

いや、そこは話し合おうぜ！！

「やべー！！」

秋弥が再び小さい声で隣で叫んだ。

秋弥の頭を叩いてから口を塞ぐ。

マジでやべー！！どうする、マジどうする！？

汗が頬を伝った。地下で涼しいのに、汗が滲む。

いや、落ち着け俺。まだなんか手があるはずだ。

この階段を引き返すのは得策じゃない。この先が一番怪しいから、とにかく見ておかないと。

じゃあこのままここにいいのか？

いや待てよ。階段登ったところに隠れるとこなかったっけ。

とにかく行かないことには始まんねえ！！

「秋弥、引き返せ！！」

「は！？」

「一旦隠れる！！ヨイチ殴って拉致れる奴相手に俺達が応戦できるわけないだろ！！」

「そ、そっか」

秋弥が走って登り出す。

俺も後を追いかけて走った。一段どころか数段飛ばして駆け上る。

でも、俺達元・現代っ子なんだよな。

悲しいかな声は段々近づいてきてる。

しかも俺達足音消しきれずに気づかれたし！！

「秋弥、急げ!!」

「残念なことにこれがオレの全速力!!」

もうなりふり構ってる暇なんかねえよな、うん、ねえよなと目で会話を話す。

仕方ない。

秋弥もそう判断したのか、急に速度を上げた。ただし、足音は大音響で。

俺も大音響で走った。

階段を登りきって——俺達は焦っていた。手で暗い中を手探りで探しているのになかなか隠れられるような凹凸を見つけれない。嘘だろ!?! 追いつかれるって!!

「マジか!!」

秋弥が荒い息でそう言った。

背後で階段を登る足音が止む。暗かった足元が僅かに明るくなった。これ以上逃げるのはもう完璧得策じゃない。万事休す。

「ゆっくりこっちを向け」

男の声に言われた通り振り返る。

あれ、この声…。

振り向いて俺はあんぐりと口を開けた。

「あーっ!!」

秋弥が隣で声を上げた。

「お前、あの時の山賊じゃん!!」

そう、何を隠そう松明を持って仲間と俺達を追い詰めていたのは、シリティアのストーカー事件の時の山賊だったのだ。

通りでさっき拾ったピラスに見覚えがあるはずだ。だって、目の前の山賊の耳でもう片方が揺れているのだから。

「お前らはあの時の!!……えーっ!!」

思い出せよ!! 確かにあの時ヨイチが強烈だったけどさ!! いたぜ!!? 俺達!!

「ま、まあいい。お前ら、そこでじつとしてろよ？ 動くんじゃねーぞ」

男とその仲間がジリジリと詰め寄ってくる。
クソ、なんか、なんかないか。

焦ってポケットをズボンの上から押さえる。そこで——何か固い物に手が当たった。

これ、は。

ハッと思い付く。

いけるかも！！

「止まれ」

なるべく腹の底に響くような声を心がけながらそう言う。

「ああ？」

男とその仲間が俺の言葉に怪訝そうな顔で止まった。

隣の秋弥も怪訝そうに俺を見ている。

「なんだ？ ビビっちゃったのか！？」

ギャハハハと下品な笑い声が反響する。

しかし俺はここでビビるわけにはいかないのです。

「お前ら、俺達にそんな態度でいいのか？」

「はあ？ いいも悪いもねえだろ」

「本当に、後悔しないんだな？ ——この」

一步、俺から男達に近づいて前髪をかきあげる。

「瞳と髪を持つ者が何者か、知らぬわけではないだろう？」

男達はそこでようやく俺達の髪と目に気付いたようで、小さく悲鳴が上がる。

「魔族だ！！」

「離れろ！！」

目の前の男達と距離が出来た。

わーわーと騒いで逃げようとしているのを見て胸のあたりが重くなる。

う、やっぱちょっとショック。この対処法、俺のメンタル面を抉っ

ていくわ。

シリティアの時の山賊がまだ虚勢を張って若干腰を引きながら手に持った剣を突き出してくる。

「だ、騙されるなお前ら！！ちょっと暗いから、紺の髪が黒に見えるだけ……！！」

「嘘ではない」

言葉を被せ、なるべく淡々と見えるように無表情を作った。

秋弥が隣でガンバ！！と拳を握っているのが見えた。

気楽だな、おい！！

「しょ、証拠はどこにある……！！」

待ってました……！！とばかりに俺は笑う。

だって本当に待ってたからな。

「いいだろう。見せてやる」

ポケットに手をつ突っ込んで——俺は、ライターを取り出した。

カチッと火を灯し手を伸ばし男達に近付ける。

「一瞬で火が……」

愕然とした声が届いた。

「これぞ我らが魔族である証拠だ……！！これの前ではお前らなど無力に等しい……！！そこの塵らしく、焼ききってくれる……！！」

頭上に手を上げてそう言い放つ。

実は0円のライターだから、灯油とか掛けない限りそんなすぐには燃え広がらないんだけどね……！！

「本物だ……！！」

「魔族だ……！！」

「殺されるぞ、逃げろ……！！」

口々に叫びながら、しかし男達は動かない。正確には動けない。だって俺達は階段から洞窟へ続く入り口の方に立っていて、男達は階段の入り口の方に立っているからだ。

階段の方に逃げてもほぼ意味ないですしね……！！でも洞窟へ続く入り口の前には俺達がいるし、さて、どうする山賊の皆さん。

俺は寛大な心を持っているような声を出した。

「武器を捨てるなら…」

「どうせ殺されるなら俺は生き残れる方を選ぶ!!」

そう言っただけの男達の中の一人が剣を振りかぶって突進してきた。

なんでそうなの!! つーか俺の話最後まで聞けよ!!

剣の切っ先はもう俺達に向かって振り下ろされている。

あ、ヤバイ。異世界でどうやら俺達の人生は幕を閉じるみたいです。

夕花との約束、守れそうにないよ、ごめん、夕花――。

突然目の前の男が横に吹っ飛んだ。当然、剣も一緒に吹っ飛んで、

俺達は命拾いをした。

何が起きて…。

「ヒロト!! シューヤ!!」

この、声、は。

目の前に、捜していた赤の双眸があった。

洞窟に入っていたったきりいなくなっていたヨイチが、俺の前に立っていた。

「ヨイチ!! 無事だったのか!!」

秋弥が安堵したように言った。

俺もホッとしてライターをポケットにしまう。

ヨイチを改めてよく見ると、額に打ちつけたような傷ができていた。血が滲んでいる。

もしかして、この血があそこに付いてたのかな。

「ああ、まあ一応ね。声でかいから話、聞こえてたけど…」

ヨイチにチラリと見られる。

うん?なんだ?

首を傾げるとなんでもない、と首を横に振った。

「まあ、話は後だな。とにかく今は」

ヨイチが山賊の方に目をやる。

俺達も竦み上がるぐらい怒りのこもった目に、山賊達が汗をダラダラと流しながら一歩引いた。

「こいつらを殴らなきゃ気がすまない」
その数秒後、洞窟に山賊達の絶叫が響いた。

それから早かった。

ヨイチにボッコボコにされた山賊達にヨイチを拉致った理由を聞き出し、

「以前の仕返しをしたかったから」

という回答を半ベソをかきながら答えた山賊達は再びヨイチの手によってボッコボコにされ、その後山賊達の絶叫を聞いて中に入ってきたカウジェさんと村の男達が王都の警備隊まで届けていった。

上にいた夕花達と合流すると紅葉とシリティアは「よかったー！！」とちよつと涙目で言った。

「おかえり、3人さん」

夕花がどこか安心したように笑って言った。

「ただいま戻りました！！」

こうして長い夜は終わりを告げた。

――翌日、俺達は例によってシリティアの部屋に集まっていた。

「結局、七不思議はその山賊の歌だったわけだ。あんな風体で、意外な特技だったな」

どうやら洞窟から山賊が出てきた時その姿を見たらしい夕花が、ベツドに座り足を組んで言った。

「いっそのことその特技を生かして楽師とか、歌い手になればよかったのにね」

紅葉がその隣に座って言った。

「ホントだよな。思いつかなかったのかな」

「なんか、ちょいちょい残念な奴らだな」

秋弥が呆れたように言う。

「ていうかヨイチ!! 危ないかもしれないから行っちゃダメって言ったのに行っちゃうから!! べっ、別に心配したわけじゃないんだからね!!」

ツンと、シリティアが横を向く。

「ごめん、シリティア!! でも怒った顔も可愛いよ!!」

「ヨイチ!!」

シリティアに睨まれてヨイチはすごすごいつもの雰囲気を持っていくのを止めた。

いい選択だ、ヨイチ。

今の間違ったらシリティアにボッコボコにされてたぞ。

「なんか、本当にすみませんでした!! あと、……シューヤ」

「ん？」

秋弥がヨイチに向かって首を傾げる。かなりの間をとったあとにヨイチが口を開いた。

「……………助かった。ありがとう」

秋弥が目丸くする。

デレ第2段!!

呆気にとられた俺達の中で真っ先に夕花が立ち直り、咳払いをした。

「ま、まあ何にせよ、無事だったんだからよしとしよう」

それからいつも通り雑談を始めた。

その様子を見ているとヨイチが隣にきた。

「ヨイチ？」

「悪かった」

「え？」

「……あんなこと、言わせて、悪かった」

ヨイチが目逸らして言った。

あんなことって。ああ洞窟のことか、と合点がいく。

俺は思わず、笑う。

「いいって。ヨイチが無事でよかったよ」

まあ何にせよ、最後はめでたしめでたしってことで！！

万事休す!! (後書き)

長くなりました(^ | ^ ;)

次回、本編は夕さん!

番外編を書いていこうと思います〜
(≧▽≧)

俺達の出会い（前書き）

番外編です！

紘斗達3人の出会い編！どうぞ！

俺達の出会

「そういえば、ヒロトとユーカーとシューヤは生まれた時から仲良かったの？」

突然、シリティアがそう言い出し、俺達は顔を見合わせた。

「何だ、突然」

夕花が決まり悪そうに少し顔を背ける。

まあ、夕花はなあ。結構、大変だったからなあ。

俺と秋弥は苦笑する。

「それ、私も知りたい」

紅葉が身を乗り出した。

「いや、実は中学に入学してからなんだよな、オレ達が連むようになったの」

秋弥がそう言って、なあそうだよなと

目で確認してきた。

俺は頷いて返す。

「チュウガク？」

シリティアが首を傾げる。

「あーそっか。えーっと、日本では義務教育があつてさ。最低でも子供に9年間は勉強させてやれーってやつが。1〜6年目までは小学校、その7年目から9年目までは中学校に通うわけ」

俺がそう教えるとシリティアは感心したように目を丸くした。

「じゃあみんな勉強できるの？すごい国ねえ」

「俺達にとっては結構当たり前だったんだけどな」

ここに来て、当然じゃないと気付いた。

恵まれてたんだよなあ、俺達。

「オレら3人全員クラスが同じになってさ」

クラスはくくりのこと、とシリティアに教える。

「それでオレと紘斗はすぐ仲良くなったんだけどさ、夕花がなあ、ふぐっ」

「秋弥!!」

夕花が珍しく慌てたように秋弥の口を塞いだ。

「ちょっと、ユーカ!! 邪魔しないの!! 話聞けてないのよ!!」
シリティアが夕花に言う。そしていつもならやり返す夕花もこれまた珍しくうろたえていて、素直に秋弥の口から手を離れた。

「う、ぐぐぐ……!!」

何か堪えるような呻き声を出している。

俺は苦笑してあの日を思い出した。

「たしか…」

—— 3年前、季節は春の半ば。

俺は中学に入学し、それなりに満喫した生活を送っていた。

中学入ってすぐに秋弥と仲良くなり、クラスの男女両方共とほぼ満遍なく話せるようになっていた。

そう、ほぼ。つまり、完璧ではない。

その話せていないのが、夕花だった。

「黒井って話しかけにくいよな」

秋弥に話しかけるとうんうんと頷いた。

「なんか、他の女子とも連んでねえし、なんでかな」

なんか、当時の夕花はいつも1人で、誰かと連んでいるのを見たことがなかった。そのせいか、クラスの中で孤立し始めていた。女子の中では夕花を目の敵にしてハブるような奴もちらほらと出てくるようになった。

原因は、夕花に無視されたから。

それは確かに凹むけど、ハブるまではいかねえだろ、とか思った。一度話し掛けようとして、俺を見るその目にすごすごと引き返した

のは悲しい思い出だ。

なんつーの？こう、「何を気軽に話しかけてきてんだよ、ああ？あたしは誰とも連まないからな」って目だった。

そんなある日、総合の時間に薄い冊子が配られた。

そう、それは入学して一番最初の行事である、宿泊研修のしおりだった。

「6人を目安に班作れー」

先生がそう言うとかラスは騒ぎながら班を作っていった。

俺は秋弥と他男子3人と組み、5人になっていた。

しかし、ここでも女子のグループ社会。

夕花が1人あぶれるというパターンに陥った。

「あーどこかの班、黒井入れてもらえないか？」

先生が女子の方を見て言った。

「えーでも先生ー、私らもう6人でいっぱいなんですけどー」

クスクスと笑い声が上がる。

うっわー嫌な奴ら。こんな俺でも泣いちゃうって。

俺は夕花が泣きやしないかと夕花に目をやって——文字通り、

固まった。

ピンと背筋を伸ばして、泣くどころか笑った女子達を冷ややかに一瞥していた。

女子の笑い声が止む。

ふん、と鼻を鳴らして夕花が皮肉気に唇の端を吊り上げた。

俺は思わず笑う。

いい。あいつ、超いいじゃん。そこの女子なんかより、ずっとお

近づきになりてえよ。

「あの一どこか……」

「はいっ」

俺は手を挙げた。

別に男子の班に女子が入っちゃいけないなんてルールはない！！

「俺達の班、一人分空いてます。入れるよー」

夕花に向かって笑って手を振る。

「おいおい紘斗っ」

同じ班の男子が俺の肩を掴んだ。

「いいじゃん、いいじゃん。空いてるのオレ達の班だけだし、女子いたほうがムサくないし」

秋弥が隣で茶々を入れる。

秋弥ならそう言ってくれると思ったぜ！！

「あー確かになー」

男子の意見、総一致。

「黒井はそこでいいか？」

先生が夕花に確認をとる。

俺は期待を込めて夕花を見た。

夕花と目が合う。

「——はい。構わないです」

夕花が俺達の班まで歩いてくる。

俺の隣の空いている席に座ると俺を見てボソツと呟いた。

「助かった」

ほらね、やっぱ正解だろ？

でも、現実には甘くなかった。

宿泊研修が始まって夕花は一人で行動した。

待て待て待て待て！！何のために班編成したんだよ！！

「ちよっ、黒井！！先々行くなって！！」

「お前らとどうせ現地で顔を合わせるんだから、どんなペースで行こうと構わないだろう？」

「宿泊研修の意味考えてー！！」

思わず叫ぶ。

マジかよ。この社交性のなさ、幼稚園児以下じゃねえか！！

「お前、ちよっとはオレらと歩こうぜー？せっかく同じ班になった

のにさー」

秋弥が頭の後ろで手を組みながら言った。

うんうんと頷く俺を見て夕花がふん、と鼻を鳴らした。

「くだらない。あたしは、そういうグループ社会が大嫌いなんだよ」
ピシッと俺の脳内自己映像にひびが入った。

夕花が背を向けて歩き出す。

結構遠くに夕花の背が見えだした頃、動かない俺を見て秋弥が俺の肩を叩いた。

「紘斗ー？おーいっ」

「…の野郎…」

「は？」

顔を上げて夕花を見る。

ふざけんなよ！！

「何が何でも引っ張り込んでやる！！」

人間、一人で生きていけると思うなよ！！

俺達の出会い（後書き）

次、
夕さん！

あたしと爆弾（前書き）

夕です。

過去話は難しいですね！

あたしと爆弾

と、ここまで話して紘斗が休憩というように息をついた。

「：お前ら。なんだその目は」

シリティアと紅葉がなんとも複雑な表情でこっちを見ていた。

「だってユーカが、：ねえ？」

「うん、まさか夕花が：」

隣でにやつとした秋弥の腹には拳をぶちこんでおいた。

「お、落ち着け！全部事実じゃないかっ！」

涙目の秋弥と、違う意味で泣きたいあたし。

そんな中、非情にも紘斗の話が再開される。

今から何年前だっただろう。確か：3年くらい前だったか。

あたしの生活はふたつの爆弾によってガラリと変わってしまったのだ。

余計な関わりを持ったばかりに面倒事に巻き込まれるというのが嫌だった。女子のグループはそういう面倒事の宝庫だ。だから必要以上に関わりを持たないようにしていた。

真田と朝霧も例外ではない。

「黒井ー！！」

結局、あたしと班のメンバーは集合場所で合流を果たした。

昼食時間、ひとりで弁当を食べていると、ふたりが各々弁当を持って寄ってくる。

他の男子と食べればいいのに。

「お前なあ、もっと協調性とかなんとかいうやつをだなあ：」

「そーだそーだ！」

はつきり言おう、うるさい。

あたしのうんざりした表情に気付いているのか、ふたりはピクニック用シートを広げ始めた。

：なんでそんなもの持つてるんだ、準備がいいな。あたしも地べたに座っているのに。

「黒井の弁当、意外に女子っぽいな」

意外で悪かったな。

「まあまあ、こっち来てシートに座れよ」

誰がそんな一面某アニメキャラのシートに座るか。

「紘斗ー、黒井がまた無視してくるー」

「だよなー。俺らがひとりで話す変人みたいになってるよなー」

こっちをちらちら見るな！

まったく！なんなんだ、こいつらは！！

「物好きなやつらだな」

ぽつりと漏らすと、「黒井から話しかけてきた！」と盛り上がる始末。

はやくこの場を離れようと、急いで弁当を食べきり立ち上がった。

「もうついてくるなよ。いいな？」

あたしは、そう言ったはずだったのに。

なぜだ！

なぜ行く先々にやつらがいる！嫌がらせなのか！

：そしてついに、一度もひとりになれることなく宿泊研修一日目が終わってしまったのだった。

グループ分けをしたとはいっても、さすがに寝るのは女子男子別々の大部屋だ。そこに各自布団、いや寝袋か？…を敷いて寝ろということらしい。

疲れた。とにかく早く寝てしまおう。

大人数でかたまつて寝るやつらの邪魔にならないような端の方にさっさと布団を敷いてしまう。
そして早々に眠りについた。

朝、同じ大部屋の誰よりも早く起きて、気づいた。

「……ない」

枕元に置いておいたリュックサックが消えている。

着替えの体操服も洗面用具も全部あの中だ。

「ここまで低レベルなやつらとは……」

寝る前にはあった。リュックが勝手に歩いていなくなるとは思えない。

どうせなら、あたしより早く起きろ。

とにかく誰が起きる前に探しにいくか。大方、建物の中で先生に見つからないような所に押し込んでいるのだろう。

適当な隠し場所を思い浮かべながら部屋を出た。

が。

甘かった。

「外に隠したのか？」

思いつく場所を手当たり次第に調べたのに、リュックはついに出てこなかった。

早く見つけないと、先生にあやしがられる。そうになったら面倒だ。

起床時間まで後30分。

あたしは思いきって外へ駆け出した。

「……………」

あたしが寝てから実行に移したのなら……見回りもあるだろうし、そう遠くではない。

と、なると。

「…あった」

窓から外に投げるしかない。

あたしのリュックは窓の外に飛ばされ、少し急な斜面の途中で突き

出した木にひっかかっていた。

リュックまで手は届きそうにない。

「さて、どうするか。…まあ、下りるしかないけど」

そろそろと足を片方ずつ引っかけるように下りていく。

何度かバランスを崩したが、リュックのところまではたどりつけた。

リュックを片方の肩にかけ、後は登るだけ。

「……………登る、だけ」

目の前の斜面、掴むところが、ない。

一瞬思考が停止した。

「やって、しまった…」

遠くで誰かが走っている音が聞こえた。

そろそろ起床時間だ。先生があたしの姿がないことに気づいたか。

呼べばすぐに来てもらえるだろう。

でも呼ぼうとは思わなかった。何があった？だとか、誰がやった？

とか、何の解決にもならない質問をぶつけられるだけだ。

先生とはそういうもの。

「いた！黒井！」

上から声が降ってきて、複雑な思いで顔を上げる。

「すみませ…」

「ん？どした？」

すみませんでした。そう言いかけて、顔がひきつるのを感じた。

「朝霧…お前か…」

嬉しいやら悲しいやら。

「女子が黒井さんが消えたーって騒いでたから、紘斗と捜してた」

ん、と伸ばされた手を、あたしは掴むしかなかった。

あたしと爆弾（後書き）

結局：これは何が言いたかったのだろうか。
反省点がありすぎる。

そして夕花さん、いつたい何時に起きたんだ。

次で番外編完結

秋雨さん！がんばれ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6754r/>

とりあえず、自己紹介でもしますか

2011年10月8日13時34分発行